

---

# 黒の配達屋

雷雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒の配達屋

### 【Nコード】

N9489M

### 【作者名】

雷雲

### 【あらすじ】

約束の時間を過ぎると殺される。中の荷物は必ず見てはいけない。それが黒の配達屋。黒の配達屋レイリーは、治安が悪化したレブライトシティをランサーエボリューションに乗って走る。腰に二丁の拳銃をつけて。

## 配達屋と奪い屋（前書き）

俺こついの書きたかつたんだなあ  
…

## 配達屋と奪い屋

グレーのランサーエボリューション？は治安が悪化したレブライトシティの大通りを走っていた。

午後11時29分。約束の時間まであと31分。約束の時間を過ぎると殺される。中の荷物は必ず見てはいけない。

それが、黒の配達屋。

黒の配達屋は、普通の配達屋（白の配達屋）には頼めないものを配達している。たとえば、謎のデータチップや、機関銃などの武器や、謎の生命体などだ。

ランサーエボリューション？（ランエボ？）は午後11時46分に約束の場所へ着いた。場所はこの街のシンボルであるレブライトタワーだ。

ランエボ？から男が出てきた。男はトランクから木箱を取り出した。男はそれを持ち、タワーの屋上に行った。

タワーの屋上にはスーツを着た男がいた。周りには拳銃を持った男が5人ほどこいる。スーツの男が口を開けた。

「お前がレイリーか？」

ランエボ？に乗っていた男が言った。

「ああ。そうだ。これが荷物だな」

レイリー（ランエボ？に乗っていた男）は木箱を男に渡した。男は封筒を渡した。

「報酬だ。」

レイリーは封筒を受け取り、ポケットに入れた。そして、男に背を向けた。

レイリーはランエボ？に乗り、さっきの大通りを走っていた。その時、何人かのグループがバイクに乗って走ってきた。

暴走族。別名、奪い屋。黒の配達屋の敵でもある。

暴走族は、ランエボ？の右にある、車の横に並んだ。

その時、暴走族たちが何かを取り出した。

拳銃、コルトガバメント。

暴走族たちはランエボ？の右にあった車のタイヤを撃ち、パンクさせた。暴走族たちは速度を落とし、レイリーの視界から消えた。

レイリーは後ろで何が起こっているかがわかつている。暴走族たちは、片っぱしから車をパンクさせ、その車から金目の物を盗む。もちろん人を殺すこともある。依頼を受けて奪うこともあるらしい。

そして最後。暴走族は特に黒の配達屋の車を狙う。

銃声がした。おそらく、あの車に乗っていた者が殺されたのだろう。

レイリーは車の速度を上げた。後ろから暴走族が追ってくる。レイリーは窓を開けた。右手をハンドルから離し、腰から何かを取り出した。

拳銃。ベレッタM8000。

レイリーは手を窓から外へ突き出し左手で運転しながら暴走族を撃った。一つのバイクが遠ざかっていく。そして角を曲がり、小さ

な道路へ走っていく。

だが暴走族から振りきれない。暴走族が撃ってきた。地面に銃弾が当たる。ランエボ？は何とか銃弾を避けていた。

数メートル先にジャンプ台がある。そこから大通りに抜けられそうだ。

ランエボ？はジャンプ台へ行き、飛んだ。とっさにレイリーは暴走族たちを撃つ。

何とか振りきった。ランエボ？は大通りを走っていく

場所は変わり、路地裏の一つの建物。ランエボ？はそこに入っていく。ここがレイリーの住居。

黒の配達屋はよく暴走族に狙われるのでこういった見つかりにくい建物を住居にする者が多い。レイリーは鍵をあけ、中に入った。中は狭く、薄暗かった。レイリーは電気をつけ、服を脱ぎ、エアコンをつけ、ソファで寝た。

こうしてまた配達屋の一日が終わった。

## 配達屋の一日（朝～夕方）

窓から光が差し込む。

レイリーは体を起き上がらせた。机の上にあるリモコンでテレビをつけ、台所へ行く。

時間は7時25分。レイリーにとってはかなり早く起きたと言えるだろう。

レイリーが起きる時間は平均10時。朝早く起きてても何もするところがない。

レイリーはカップを手にして椅子に座る。カップの中にはカフェオレが入っている。

……チン！

パンが焼け終わったようだ。

レイリーはその合図を聞き、台所へ向かう。皿をもってレンジへ行く。パンを取り出し、机に置く。冷蔵庫からはバターを取り出した。

レイリーは朝食を終わらせ、着替えて外に出た。外は静かだった。ランエボ？の所へいった。車に入り、ランエボ？で路地裏を抜けた。

レイリーは曲を聴きながら車を走らせた。大通りは路地裏の様子と正反対でとても賑やかだった。人通りは多く、トラックや通勤用の一人乗り自動車などが走っている。奪い屋はいない。なぜなら昼に黒の配達屋は仕事をしてないからだ。あくまでも奪い屋は黒の配達屋を狙う。

ランエボ？は左に曲がり、小さな店に着く。看板にはビルの洋服店と書いている。店の中は洋服が並んでいた。レイリーは店員に「銃こそ最強の武器なり」と言った。店員は後ろにあったボタンを押した。

すると壁が開き、中には沢山の銃器があつた。この店は銃も売っていて、合言葉を知っているものだけがこの部屋に行けるのだ。その部屋にいた店員が言った。

「おっ！レイリーじゃないか！待ちくたびれたぞ！」

「ダフスト。9mmパラベラム弾ケースを5個、あと、この修理を頼む」

レイリーはポケットから拳銃、ベレッタM950を取り出し、ダフストに渡した。

「わかった。五分だけ待ってくれ」

そして五分経つとダフストが言った。

「ほらよ。2000ギルド」

レイリーは銃と袋を受け取った。そして財布から、札を二枚取り出しダフストに渡した。レイリーは「子供は元気か？」と言った。

「元気さ。だが、銃に興味を持たなくてね……」

レイリーは間を空けて言った。

「そのほうがいいだろう。俺たちのような仕事は危険だからな」

レイリーは店を出て行った。

その時、体の大きな男にぶつかった。

「おいてめえ！なにぶつかってんだよ！殺すぞ！」

「おまえのその太った体じゃあうまく避けきれねえだろ」

レイリーはそう言い、ランエボ？へ行った。男はコルトガバメントを取り出し、構えた。

「てめえ……ぶつ殺してやらあー！」

レイリーは振り返り、コルトガバメントを弾いた。

「な……」



そして腹に蹴りを入れた。

「ごは……」

レイリーはベルトに蛇のバッチが付いていることに気付いた。

「お前。奪い屋か」

このバッチは奪い屋の証である。

「ぐ……」

「そんな危険な仕事辞めたほうがいいぞ」

レイリーはランエボ？に乗り、大通りを走って行った。

「そういえば冷蔵庫が空になりそうだったんだな」

レイリーは街の中心部にあるデパートへ向かった。

レイリーは駐車場にランエボ？を止め、デパートへ入った。デパートの中は人であふれていた。レイリーは、必要なものをかごに入れ、カウンターに行った。その時隣にいた男が叫んだ。

「おいお前たち！これを見やがれ！」

拳銃を持っていた。

悲鳴が一斉に聞こえた。

「いいか！一歩も動くな！……おい！お前！」

男は店員を指差した。その時、その男が誰かわかった。

ビルの洋服店で会ったあの太った男だ。

「売上金を持ってこの袋に入れろ……」

レイリーは立ち上がり、あの男に蹴りをいれた。

「ごは………て、てめえ！………あれ？」

「お前は奪い屋をやめてこれをする気になったのか？」

「く……くそっ……」

男は逃げていった。レイリーはカウンターに向かった。周りにい

る人はすべて直立不動になっていた。

「これ」

「あ……は、はい」

店員はすこし手が震えながら会計をしていた。

「……1560ギルです」

レイリーは袋に物を入れて、デパートを出た。デパートはまだ静かになっていた。

そして、家に戻った。夕日が暮れる。もうすぐで仕事の時間だ。

**配達屋の一日（朝～夕方）（後書き）**

サブタイトルがいいのが思いつかなかった………

## 配達屋の一日（夜）

夜8時、誰かがドアをノックした。

ドアを開けると女が立っていた。

「……………依頼か？」

「……………ああ。そうだ。これを届けてほしい」

女はケースと地図を渡した。

「制限時間は11時だ。それでは頼む」

女は出て行った。

レイリーはサンドイッチを食べ、外へ向かった。レイリーはケースをランエボ？のトランクに入れ、乗り込んだ。

「さて。どこなのかな……………」

レイリーは地図を広げた。どうやら学校らしい。レイリーは「本当にここなのか？」と戸惑いずつも車を走らせた。

9時、学校へ着いた。あたりは暗く誰もいなかった。運動場を見渡していると人がいた。

「あいつか……………」

レイリーは門を飛び越え、運動場へ入った。レイリーがその者に近づくと男と言うことがわかった。その時、男は銃を向けた。

「っ！」

「配達屋か？」

「あ、ああ。」

男は銃をホルスターに入れた。レイリーは持っていたケースを男に渡した。その時、男が言った。

「その頸飾りは何だ？」

「ああ。これか？お守りだ。」

「そうか…報酬だ。」

男は封筒を渡した。レイリーはそれを受け取り、男に背を向けた。

そしてランエボ？に乗り、学校を去った。

人気の少ない大通りを走っていると、フェラーリが製造したF355が走ってきた。レイリーは舌打ちをした。

「よう！レイリー！レースしないか？」

「……………おまえは何度目だ。俺は嫌だと言ったはずだが。」

「まあそう言うな。俺、ガウルが、すげドライビングテクニク見せてやるよ！」

「そう言つて、車を4回も潰しただろうが。それに、車がなければ、配達屋はやっていけないだろ？」

「お前の車のトランクはスペースが少ないじゃないか。」

「俺はスピード重視だ。」

「……………わかった。そういえば、お前先月稼いだ金何ギルだ？それに死にかけた回数？」

レイリーは青信号になったので車を走らせながらこう言った。

「約1億ギル。死にかけたのは0回だ。」

ガウルは大声でこういった。

「約6000万ギル！！死にかけたのは約20回だ！！じゃあな〜」

レイリーはふと思った。

（ある意味不死身じゃないのか？お前。）

レイリーは自分の家に着き、家に入ろうとした。

その時、中で物音がした。レイリーは銃を構え、静かにドアを開けた。そして、リビングへ向かった。

リビングには何とあの太った男がいた。

「……………どうしてここにいる。」

レイリーは銃を向けながらいった。

「あ、お帰り！兄貴！」

「……………兄貴？」

「はい！もうあんなことはやめて、配達屋にすることにしました！なので、ここで勉強させてもらいます！」

「おまえ、この仕事がどれだけ危険か知ってるのか？」

「はい！父が配達屋だったので！」

「……………とりあえず、お前をここに居させる訳にはいかない。帰れ。」

「どこに？親は全員死にました。自分の家ありません。」

「……………料理、掃除、洗濯、その他の家事もやってくれるな？」

「はい！よろこんで！」

学校では、まだあの男が立っていた。男は携帯を取り出し、電話でこういった。

「ネロ様。ヒューチャ チップを見つけました。」

## 謎の軍用トラック

朝、太った男は台所でパンと卵焼きを作っていた。テレビでは、ニュース番組がやっている。なんでも、この国の中心地である都会のフィルシテイで、強盗事件があったらしい。犯人は逮捕されらしい。太った男は皿にパンと卵焼きを乗せ、レイリーの所へ向かった。

「おい！兄貴！起きてください！」

太った男はレイリーを起こそうとした。

「……………もう少し、寝かしてくれ……」

「何言ってるんですか兄貴！朝飯が冷めちゃいますよ！」

太った男はレイリーを無理やり立たせ、椅子に座らせた。

「……………ファル。おれが起きるのは最低9時だと言っただろ。」

「仕方ないじゃないですか、もう飯作ってしまったんだから。」

太った男がそう言い、朝食を食べ始めた。

（こんな奴なんかこの家に入れるんじゃないかった…）

レイリーは渋々朝食を食べることになった。

そして朝食を食べ終わった後、ソファに座りながらテレビを見ているレイリーが言った。

「そういえば、お前の銃は？」

「あ……………」

どうやら銃を失くしたらしい。レイリーはため息をつき、言った。

「銃を買ってやる。こい。」

「あ、はい。」

ファルは洗っていた皿を置き、レイリーについて行った。

「へー。これがレイリーさんの車なんですか」

ファルは車を見て言った。

「ランサーエボリューション？だ。お前は車に興味あるか？」

「いや、そんなにないです。」

「…そうか。」

二人は車に乗って大通りを抜けた。

大通りはたくさん乗用車が走っていた。

その中にはなぜか奪い屋もいた。だが、まず襲ってくることはないだろう。ファルは怯えていた。

「まさかばれてないよな…。」

「お前、あいつらに狙われてるのか？」

「奪い屋は一生奪い屋でいなければいけないので。勝手に出て行くと殺されます。」

「そんなルールだれが決めたんだ？」

「リーダーのコブラです。」

「コブラっていうと…蛇か？」

「はい。奪い屋の印であるバッチのマークも、リーダーの名前がコブラだったので蛇になりました。あ、ほら、あの人です。」

ファルが指さした先にはバイクに乗っていて迷彩服を着た赤い髪をしている男がいた。

奪い屋たちは車をすり抜け、先へ走って行った。

二人はビルの洋服店についた。

「ここ…洋服店ですよね。」

「ああそうだ。」

「こんな所に銃なんて売ってるんですか？」

「ああ、そうだ。」

二人は店に入った。そしてレイリーは店員に合言葉を言った。そして、ダフストがいる部屋へ入った。

「よう！レイリー！…って、そいつは？」

「ああ、こいつはファル。俺と一緒に住んでいる。」



「初めまして。ファルです。」

「へー。お前が自分の家に人を入れるなんてな。珍しいなあ。」

「仕方なかったんだよ。」

「で、何が欲しいんだい？」

「サブマシンガンです！」

「サブマシンガン！？俺はてつきりハンドガンだと…」

「えーと、これが欲しいです！」

「これは…FN P90だね。4500ギルだよ。」

「おい。勝手に話を進めるな！」

「はい！買います！」

「ええ！？」

「5.7×28？弾はあるのかい？」

「いや…ないです。」

「そのケースが5個で500ギルで売るけど。」

「はい！！買います！！」

（…お前、それは俺の金で払うことを忘れてるだろ。）

「レイリーさん！お金出してください！」

（忘れてなかった…）

結局、レイリーは5000ギル損をした。

二人が家に帰る頃、軍用トラックがレイリーの家がある路地裏に入って行くところをレイリーは見た。

（軍用トラックなんて珍しいものだな。）

二人も路地裏に入っていくところだった。だが、レイリーは車を止めた。

レイリーの家の前で軍用トラックが止まっている。

（なにかいやな予感がする…）

「ファル、銃を持って降りろ。装弾しておけよ。」

「え…なんでですか？」

「いいから。」

レイリーも車を降りた。そして、軍用トラックの所へ行った。

「そこで、何やっているんだ？…っ！」

レイリーが見たのはハンドガンを持つているスーツ姿の男たちだった。男たちは針金を使い、鍵を開けようとしている。

レイリーは銃を構え、言った。

「…おい。お前たち。」

男たちが振り向き言った。

「くそ！気づかれたか！殺せ！」

男たちは銃をレイリーのほうへ向けた。レイリーはすぐさま陰に隠れ、攻撃を防いだ。

「そっちがその気なら…」

レイリーは二丁の拳銃を取り出し、男たちの足を撃った。5人の内、1人の足に当たった。

「と、とりあえず逃げろ！」

男たちは軍用トラックに乗り、逃げて行った。

「弱いな…」

「兄貴！大丈夫ですか！」

「ああ、大丈夫だ。あの男たち。戦いには臆病らしいな。」

「それにしてもあいつらなんだったんですねえ。」

「とりあえず、車を動かす。鍵を渡すから、中に入って、様子を見てきてくれ。」

「はい。わかりました。」

ファルは家の中に入ったが、何も異常はなかった。

あの男たちはいったい何をしていたのだろうか。

## 登場人物

レイリー

年齢 ? (外見年齢30代後半)

性別 男

武器 ベレッタM8000、ベレッタM950

黒の配達屋。黒い髪と瞳をしている。長身。ランサーエボリューション?を持っている。カフェオレが好物。料理はあまり得意ではない。自分の家に人をあまり入れたがらない。父から貰った頸飾りをお守りとして着けている。ファルを自分の家に入れて後悔している。ダフストとは昔からの知り合い。

ファル

年齢 28

性別 男

武器 FN P90 (P90)

見習いの黒の配達屋。ニット帽をかぶっていて青い瞳をしている。車にあまり興味が無い。ステーキが大好物。料理は得意。父が黒の配達屋だった。

ティア

年齢 26

性別 女

武器 ?

レイリーの家の前に倒れ、ファルが家に入れた女。ある特別なサイトをハッキングするまで二人と同居している。ヒューチャ チップについて何か知っているらしい。

ブラウ

年齢 29

性別 男

武器 スタームルガー・セキリュティシックス

ピンズ警察署潜入捜査課所属。右頬に何かで斬られた傷がある。何かとレイリーたちを助けてくれる。レイリーの家の隣の家に住んでいる。インプレッサSTiを持っている。

ガウル

年齢 32

性別 男

武器 ミネビア9mm自動拳銃

黒の配達屋。黄色い髪と瞳をしている。F355を持っている。レイスが大好き。そのせいで車を4台潰してしまった。自称レイリーのライバル。

ダフスト

年齢 46

性別 男

武器を売っている仕事をしている。6歳の息子がいる。レイリーとは昔からの付き合い。

ゴルドス

年齢 37

性別 男

盗み屋。下水道で暮らしている。依頼として二丁の拳銃を盗みレイリーにわたした。ネズミと共生している。

ニルア

年齢 ヒミツ

性別 女

武器 ?

殺し屋。レイリーの妹。最近男が欲しい様子。

## 登場人物（後書き）

これからも更新していきます

## V S コブラ

ファルがレイリーの家に来てから3日。あれから仕事も何もない。  
「そろそろ金が尽きるな……」

「そういえば、あのスーツ男の奴ら、どうなったんですかねえ」  
「知らん」

レイリーはベレッタM950を掃除していた。ファルは皿を洗っている。

テレビでは生放送のバラエティ番組がやっている。レイリーはそれを見ていた。近くのテレビ局からやっているらしい。ファルが皿を片付け終わった。レイリーは銃の掃除が終わったので「シャワーを浴びてくる」と言って浴室に行った。

ファルがバラエティ番組を見て20分。番組のスタジオに異変が起こった。スタジオの壁が壊れたのだ。

そして暴走族が入ってきた。暴走族は銃を持ち、乱射している。カメラが突然低い位置になった。どうやらカメラマンが逃げたらしい。そしてカメラの位置が戻った。カメラに映ったのはあのコブラの顔と暴走族たちだった。

「おい！ファル！見ているか！？この番組はお前が好きな番組だったんだよなあ！！今すぐお前を見つけ出して、殺してやるぜ！！」

「

そのあとにコブラの笑い声が聞こえ、番組が変わった。

「ほうっっておけ」

番組を変えたのはレイリーだった。どうやらシャワーを浴び終わったらしい。

「もう寝ろ」

「……………はい」

ファルは布団を被った。レイリーがもういちど番組を戻すとその画面は砂嵐だった。

翌朝、レイリーが起きると、辺りは静まり返っていた。  
「……………」

「はっはっは！！自らこっちにくるとはなあ！！その勇氣だけは褒めてやるぜ！！」

コブラが言った。ほかの暴走族たちもわらっている。ここは廃ビルの地下駐車場。フィルは腕を縄に縛られていた。P90は床に転がっていた。

「くっ…すみません…兄貴」

「ああ？だれのことってんのかなあ？俺のことか？」

「てめえじゃねえ！レイリーさんのことだ！！」

「けっ…許してやるうかと思っただのによお」

「俺はもう一生暴走族に入らない！絶対になあ！！」

「そうかい。なら、死んでもらうとするか」

一秒、コブラが銃を構えた。

二秒、入口からランエボ？がやってきた。

三秒、ランエボ？の窓から銃弾が飛んできた。

「あ、兄貴！」

「…まったく世話が焼ける。発信器をつけなかったらお前は死んだぞ」

レイリーはドアを開け、ファルの所へ向かった。

「くそ…」

レイリーのレベッタM8000から放たれた銃弾は確実にコブラの右頬をかすめていた。他の暴走族達も傷ついていた。

「てめえ……………誰だ…」

レイリーはコブラに行った。

「何故お前に言わなければいけない」

レイリーはファルを縛っていた縄をほどき、発信器を外した。そして転がっていたファルの銃を拾い、ファルをランエボ？に乗せエンジンのかけた。

「ふざけんなよ……」

コブラはもっていたワルサーP38をランエボ？に向けた。だがすでにランエボ？はいなかった。

コブラは外に出てタクシーを止めた。そしてタクシーの運転手を車から追い出し、自分が乗った。

ランエボ？は大通りを走っていた。

「でもいつ発信器をつけたんですか？」

「お前が寝た時にニット帽に着けておいた。」

「ええ！？そんな所に？」

「……ああ、そうだ。…ん？」

「どうしたんですか？」

「ファル、降りろ、歩いて家に行け」

「ええ！？なんで！？」

レイリーはレベッタM8000を引き抜こうとした。

「わ、わかりました。」

ファルはドアを開け、出て行った。

レイリーはアクセルを思いっきり踏んだ。速度メーターの針は120を指していた。

後ろからタクシーが猛スピードで走ってきた。

レイリーはハンドルを右に回し、山道へ入った。

「この車とはもうお別れだな……」

ランエボ？は速度を落とした。瞬時にタクシーと並んだ。



タクシーの窓があき、コブラの顔が見えた。コブラは銃を取り出した。レイリーはハンドルをもう一度右に回し、ランエボ？をタクシーにぶつけた。タクシーはガードレールとぶつかり、火花を散らす。

「くそっ！」

コブラは窓に向けて銃を乱射した。レイリーは椅子を後ろに傾けた。

銃弾は窓を割り車の中を襲う。レイリーはアクセルを右の足で踏み、左の足でハンドルを操作している。

フルサーP38の弾が切れた。レイリーは瞬時にベレッタM800でタクシーを撃つ。次はタクシーを銃弾が襲った。そのせいでタクシーはコントロールを失った。だがタクシーは一気にスピードを上げ銃弾を避けようとした。コントロールが戻り始め、タクシーはランエボ？の前を走った。

タクシーが急にスピードを落とした。タクシーはランエボ？に衝突する。ランエボ？から煙が出ている。

「くっ……」

レイリーはハンドルを右に回した。コブラはその事に気づきまたスピードを上げた。ランエボ？もスピードを上げ、タクシーとならんだ。コブラはハンドルを右に回しランエボ？にぶつかった。ランエボ？も また、ガードレールに当たり火花を散らす。

山の頂上に着いた。タクシーとランエボ？は円を描くように回っている。レイリーはそこにあつたバッグを背負った。タクシーの窓が開いた。

「お前の墓を造る場所には最適の場所だなあ！！」

「その墓はお前の墓になりそうだ。」

「なんだとおおおおおお！！」

ランエボ？はスピードを上げタクシーにぶつかった。二つの車はガードレールを突き破った。

「のわあああああああああああああああああああ！！」

二つの車は森へと落ち爆発した。

## 森からの脱出Ⅱサバイバル

ファルは家につき、前に貰った合鍵で鍵を開けていた。

カチャ…………

ファルは中を見渡した。暗い。ファルは中に入り、電気を点けた。浴室にもリビングにもどこにもいない。

「…………兄貴、まだ帰ってないんですか。」

カラスが鳴いている。辺りは暗い。辺りを照らすように車が二つ燃えていた。

「ぐ……………」

場所は変わり、レイリーは目を覚ました。あれからどれぐらいたっただろう。レイリーはバッグを外し、地面に降り立った。そして辺りを見回し、木々の向こうへと去って行った。木に引っ掛かったパラシュートを残して。

「…………さて。」

レイリーは一際背が高そうな木を見つけた。

ギシ…ギシ…

レイリーはその木に登り、辺りを見回した。レブライトシティがある方角を確認し、飛び降り、そのまま歩いて行った。

「コブラさんがいたところはこのへんだよな」

暴走族達は銃を持ち、草をかき分けながら歩いていて

「気をつける。俺たちを襲った奴がいるかもしれないからな」

「とりあえず、3チームに分かれて探そうぜ」

「おう」

「ったく。なんで俺たちがいくんだよな」

場所は変わり、草をかき分けながらスーツ男の男はそういった。

「しかたないだろ。ネロ様からの指示なんだから」

「それに、ヒューチャ チップを見つけたら一気に幹部だぜ」

「発信機が壊れたけどな」

「だが、まだそう遠くにはいってないはずだぞ」

レイリーは着実にレブライトシティに近づいていた。

「しかし、寒いな」

レイリーは震えていた。気温は-5。風は、寒いを通り越して痛い。

「……………なんだ？」

レイリーが振り向いた25m先にはスーツ姿の男たちがいた。レイリーにはそれが気付いたが、男たちは気付いてないようだった。

レイリーは草むらに隠れた。

ザクザクザク……………

「つたぐどこにいるんだ」

「まあまあ、そのうち見つかるさ」

「ほかのチームによると暴走族たちもいるらしいんだぞ？」

「大丈夫さ、数は少ないようだし。」

ザクザクザク……………

どうやらやり過ぎたようだ。その後ろには3人の暴走族がいた。

「おい。あいつは誰だ？」

「ん？」

「ちよつと双眼鏡を見せろ」

「……………っ！あいつは俺たちを襲った奴だ！！」

「生きてたのかつくそっ！！」

「こっから狙撃するか、突撃するか、どっちにする？」

「大丈夫だ。俺が狙撃してやる！」

「でも狙撃銃なんかないんだぞ！」

「大丈夫だって」

そういった男は、銃を構えた。

……………ダン！！

銃弾はレイリーの1m右に飛んで行った。レイリーが気付いた。  
「バカヤロー！！」

暴走族は銃を構えた。だが、その時にはレイリーは目の前にいた。  
レイリーはまず左の男に左アッパーを喰らわせ、右の男に右フックを喰らわせる。

その勢いで一回転し真ん中の男に肘打ちを喰らわせる。そして、

起き上がったきた男たちにラリアット&跳び膝蹴りでKO。

暴走族達は気絶してしまった。だがその時、あのスーツの男たちがやってきた。どうやらさっきの銃声で駆けつけてきたらしい。

「レイリーだ！殺せ！」

「くっ……………」

レイリーは木々に隠れた。木を銃弾が削る。

レイリーは両手に銃を持ちながら、逃げながら後方に撃つ。こちらは木々に隠れているため、銃弾の命中率が低い。こちらも同じ状態である。レイリーは銃弾の無駄と思って逃げた。

銃声が聞こえなくなった。レイリーは暴走族たちとスーツの男たちを残し、森から脱出し、家に着いた。

## 帰宅。そして謎の女。

ガチャ…

レイリーはドアを開けた。

「兄貴！遅かったですよ！いま何時だと思ってるんですか！-！」

「…すまない。……で、誰だそいつは。」

レイリーが見たのはベッドに倒れこんでいる女の姿だった。

「なんか、家の前に倒れていたんですよ。」

「今すぐ外に出せ。ここはホテルじゃないんだ。」

「でも、外は凄く寒いじゃないですか。起きるまでここに休ませてください。」

「……はあ。」

その言葉を聞いてファルが安心してテレビを見てみると、レイリーはそれを見て目覚まし時計を持った。

ジリリリリリリリリリリリリリリリ！！

「兄貴！！何してるんですか！！-！」

「起きたら、出て行くんだろ。」

（ひ、ひでえ…）

「………うつ…ここは？」

「ほら！起きたじゃないですか！！-！」

「起きたなら出て行け。」

レイリーは目覚まし時計を止めた。

「………誰だ知らないが、すまない…今すぐここを出て行く。」  
女は立ち上がり、ふらふらしながら歩いて行った。

「お、おい！」

「ほつつておけ。自分からそう言ったんだ。好きにさせてやれ。」  
「う……」

女がドアを閉めた。

ズダアアン！！

「っ！いまのは！？」

「銃声……だな。」

「もしかしたらあの女が撃たれたのかもしれませんが！！早く行きましょう！！」

「ったく。」

ファルの勘は当たっていた。女が肩を撃たれて倒れていたのだ。

「なっ……」

「ほら！言っただでしょう！！……大丈夫ですか？」

「誰だ！！」

ファルとレイリーは声のしたほうへ振り返った。

「………またお前たちか。」

そこにいたのはあのスーツ男たちだった。

「あっ！あいつらどつかであつたような！！」

「何しにきた。」

「作戦失敗。プランBに変更する」

スーツの男たちは拳銃を取り出した。

「ファル、その女を家に運べ」

「あ、はい！！」

「さて、お前たちのボスは誰だ。」

「ふっ、お前に教えてどうしろってんだ」

「そうだな……そのボスを殺そうか？」

「ふざけるな！」

男は銃を構えたが、すでにレイリーから左ボディブローを喰らっ



ていた。

「ごはっ」

そして右ストレート。右の銃を撃とうとした男にローキック、そして左アッパー。後ろの男にひねり蹴り。前の男に右フック。倒れたところをスタンプ。後ろの男に二段蹴り。ボディブローを決めて右ストレート。

「もう俺たちに手を出すな。」

「ぐ…殺せ。」

「いやだね。俺が銃を抜いた時は、本当に殺す。と思ったときだ。」  
レイリーは家に入ろうとした。

「くそおー！」

男は立ち上がった。そして銃を向けた。

「しつこい。」

レイリーは走り出し、男に左ボディブローを喰らわせた。次に右ボディブロー。次に左アッパー右アッパー。次に左フック右フック。そしてジャブ、右ストレート。

男達は逃げて行った。

「兄貴！！大丈夫ですか！？」

「ああ。」

レイリーは家に入った。

「…なんで私を助けた。」

「知らないね。それよりファル。病院に連れて行きな。出血がひどい。」

「あ、はい。」

ファルは女と一緒に家を出て行った。

「さて、車はあいつに頼むか。」

## 下水道

レイリーはドアに鍵を掛け、大通りに出た。まだ賑やかである。そしてタクシーを止めた。

「レブライトシティ第二公園まで」

レイリーはドアを閉めた。景色が変わっていく。

「金は足りるだろうな…」

「お客さん。なんであんな所へ？」

「なぜお前に話す」

「なっ…」

レイリーは窓をじっと見ていた

。

景色が止まった。

「お客さん、着きましたよ」

「…ああ」

レイリーはタクシーを降りた。

「まったく変なお客さんだなあ」

タクシーは向こうへ行ってしまった。

「ゴルドス」

レイリーがそう言うと、瞬時にそこにあつたマンホールが開いた。  
「ようレイリー！！久しぶりだなあ！！」

「ゴルドス。依頼だ」

「まあまあ。久しぶりに会ったんだから話でもしようぜ」

レイリーとゴルドスは下水道にあつた木箱に座った。

「しかし、レイリーが来るんだとはな。2年以來か？あの時は俺が二丁拳銃を盗んできたんだよな」

「…ここの暮らしはどうだ？」

「まあ…カビくせえけど…結構サツには見つからねえし、これはこれでも快適な暮らしよ」

ゴルドスは持っていたパンをちぎり、床に投げた。

「それに、友達もできたしな」

ゴルドスは床にあったパンを指差した。するとネズミたちがそれを食べていた。

「共生…だな。俺は食糧をあげてやってんだよ」

「ネズミは？ネズミが何もしなければそれは共生とは言わんぞ」

ゴルドスはまた違うところを指差した。そこには大きな穴が開いており、棚が埋め込まれていた。

「これ、全部ネズミがやったんだぜ？掘るスピードが意外に速くてよ……一日もたたずにできちまったんだ。ネズミは俺の家を広げてくれる大工のようなもんさ」

「そうか」

レイリーと話しているゴルドスは実は盗み屋である。盗み屋とは金さえだせばなんでも盗む泥棒のエキスパート。警察と盗み屋たちは敵同士であり、毎日どこかで警察と盗み屋が戦っている。ゴルドスはその中でも非常に頼りになる存在。盗みに失敗したことはほとんど無く、お金もそんなに要求しない。（盗み屋に依頼を任せるときは普通一億以上かかるが、ゴルドスはその半額、五千万である。）

「で。依頼って何だ？」

「車を盗んでほしい」

「お前、車を潰したのか？あんなに大事にしてたのに」

「仕方なかったんだ」

「車ってランエボ？か？」

「ああ、そうだ」

「わかった。なら、二時間だけ待ってくれ」

ゴルドスは下水道を出て行った。ネズミたちはまだパンを食っていた。

バシャン！！

それはゴルドスが下水道を出て行って約30分後になった音だった。レイリーは銃の掃除をしており、そこにあったパンはすでに無くなっている。

「なんだ？」

レイリーはレベッタM8000を持って音がしたほうに近づいて行く。どうやらあの角の向こうからなったらしい。

「……………」

レイリーは息を潜め、銃のリロードをする。だがその隙にレイリーは銃を後頭部に押し当てられていた。

「……………誰だ」

「ヒューチャーチップを渡せ」

「何だそれは」

「お前が、持っているのだろう？」

後ろにいる男はレイリーの頸飾りに手を触れた。

「やめろ！！」

レイリーはその瞬間に後ろの男に向かって肘打ちをした。

「ぐっ……………」

さらにひねり蹴りをした。

「はっ」

だが避けられた。レイリーはとっさに後ろに歩いて間合いを取った。レイリーはその時初めてその男の顔を見た。

男は20代前半で氷のような黒い眼をしていて、髪はショートヘアで青色。耳には銀色のリングが付いてある。そして、何より右頬になにかで斬られたような傷がある。服はフルジップパーカーを着

ていて、下半身にはジーパン。腰にはホルスターが付いていて、その男は拳銃のスタームルガー・セキュリティシックスをこちらに向けていた。

「お前は誰だ？」

「お前の持っているヒューチャ　チップを奪いにきた者だ」

タンツ！

男は銃を持ってない左手でナイフを取り出し、そしてレイリーに向かって走った。

「くそっ！！」

ダン！

レイリーは銃を撃ったが弾かれてしまい、そしてナイフが襲いかかってきた。

ヒュッヒュッヒュッ　　。

レイリーは襲いかかるナイフを確実に避けていた。だがそれは間違いであった。

（なぜだ？なぜ当てようとしない？）

そう、男がナイフを「わざと当てていない」のである。

「レイリー！！」

ゴールドスが戻ってきた。男はそれに気づき、逃げて行った。

「意外に早かったな」

「それより大丈夫か？」

「ああ、だが俺は早くここを離れたほうがよさそうだな」  
「ん？なんでだ？」

「あいつはこれを狙っていた」

レイリーは頸飾りをゴルドスに見せた。

「これを？」

「ああ、なぜかは知らんが、ヒューチャ チップを渡せと言っていた」

「ヒューチャーチップ！？」

「お前知ってるのか？」

「知ってるも何も俺が唯一盗むのに失敗した物だよ！」

「そうなのか？」

「ああ、十五年前の頃、スーツ男がやってきてな。ガミライズ博物館の地下室にあるヒューチャーチップを盗めって言ったんだ。俺はその通りにしたがその地下室にはもう無かったんだ。俺はあきらめてその男たちにその事をいったんだが、あいつらそれを聞いて俺を撃ちやがったんだ！俺は命からがら逃げ出したってわけさ」

「……」

「ちよつと見せてみる」

ゴルドスは顔を近づけた。

「ふむふむ……これは何か暗号を言ったら出てくるってパターンだな」

「できるのか？」

「いや、できないな。こういうのは暗号を知ってるやつしか……」

「そうか」

「あ、そういえば車、公園に置いておいたぞ。これがカギだ。」

「すまない」

レイリーは封筒を渡し、カギを受け取った。

「じゃあな」

「おう」

ガチャン。

レイリーはランエボ？のドアを閉め、ライトをつける。中は新品でカーナビに値段を書いた紙が貼ってあった。

「報酬よりもずっと安いじゃないか」

ブウウウン！！

レイリーはアクセルを踏み、ハンドルを回した

。

## ガウルと共に（１）

カチャ…

「ファル。帰ったぞ」

「あ、兄貴。お帰りっす」

レイリーは洗面器に行く。

「そういえば、あの女は？」

「ああ、三日もすれば治るって医師が言っていました。最近の医療はすごいですね。」

「そうかもしれないな」

レイリーは顔と手を拭く。

「飯は？」

「もうできてます。今日はキーマカレーです」

「そうか」

レイリーはソファに座った。

「親父は何故これを持っていたんだ？」

そう思いながらもテレビを見ていた…。

二人が夕食を食べ終わって五分後、ノックの音が聞こえた。  
「依頼か？」

トントントン。

「わかったわかった」

カチャ・・・

レイリーはその時銃を抜いたがもう額に当てられていたが、レイ



リーは相手の腹に銃口を当てていた。

「あれ？五年前には兄さんの方が勝っていたのにね。」

「ニルア。本当に撃つ所だったぞ」

「そんな時はアタイがすかさず撃つ」

レイリーの妹、ニルアは額に当てていた銃を下ろした。

「依頼よ。この男と一緒にやつてもらうわ」

「いよお！」

ニルアのすぐ後ろにはガウルが立っていた

「依頼って何だ？」

レイリーはカフェオレを飲みながらいった。

「こいつ」

「ガウルです」

「ああ、ガウルと共にある生命体の配達をやってもらいたいの」

「なら、ガウル一人で充分だろ」

「だけどその生命体は二ついて、お互い反発してしまうの。だから兄さんにもやつてもらおうと思ったの。」

「報酬は？」

「わたしとベットで寝ること」

「ふざけるな」

「わかったわよ。一億円ね」

「ファルは赤くなっていた。」

「ファル」

「あ、はい！」

「皿洗い」

「はい……」

「ファルはまだ赤くなっていた。」

「あの人は？」

「奴隷と言っても過言ではないな」

「弟子です！」

「ふーん。あなた、アタイ以外の人をいれるようになったんだ」

「勝手に入ってきたんだ。」

「それはそうと、ブツは車のトランクに入れといた。アタイはここでゆっくりしとくわ。これが地図よ。」

レイリーは折りたたまれた紙を受け取った。どうやら目的地は幽霊が出ることで有名なレブライトシティ第四公園。あそこは人が寄り付かないので受け渡しするには最適の場所だと言えるだろう。

「なら、頑張つてね」

「ファル。来るか？」

「いや、行かないです」

ファルは皿洗いをしながらもニルアをじっと見ていて時々赤くなっていた。レイリーはため息をつき、家をでた。

「おい。待つてくれよ!!」

ガウルと共に。

ガチャ。

「なあ。レースしようぜ」

「…おい！無視かよ!!」

「依頼の途中で車を潰す気にはなれない。」

「だから俺はつぶさねえって!!」

ガウルはF355に乗り込んだ。

ズタン!!!

そしてドアを閉めた。

「そんな乱暴な扱いをしてるからだ。まったく」  
レイリーもランエボ？に乗り込んだ。

ブロロロロロロ...

「行くぜ！！ひゃっふう！！」

「まったく」

そして二つの車は路地裏を抜けて行った。

大通りはやはり静かだった。音があるとすれば猫の鳴く音ぐらいだ。

ダダダダダダダン！！

それと銃声ぐらいだ。

「くそっ！！」

ランエボ？とF355はクロスしながら走っていた。

「なんだよあいつら！！」

後ろにいるのはバイクに乗った者の集団。

「暴走族か！あいつら！！」

「ちがう！バッチをつけてない！！」

そうなるとスーツの者たちだろうか。

ズダダダダダン！！

銃弾が二つの車を襲う。

「応戦するぞ！！」

レイリーは左手を右手とクロスさせるように窓に出し銃で撃つ。

ガウルも右手のミネビア9？自動拳銃でバイクの集団を撃つ。だが、こちらの方が圧倒的に不利だった。

「ついてこい！！」

ガウルがそう言い、車のスピードを上げた。

「ったく」

レイリーもアクセルを踏んだ。

なんと（偶然にも）F355はすべての銃弾を避けていた。

レイリーは角を何回も曲がり銃弾を防いでいる。

「さすがレース好き」

そういいながらレイリーはバイクの一つをパンクさせた。

「……ふっ」

レイリーは苦笑いして車を左にドリフトさせて車を降りた。そしてある物を持った。

LPガスのボンベである。

レイリーはそれを投げた。ボンベはバイクに当たり、バイクの集団が将棋倒しになっていく。そして銃を向けた。バイクの集団達は結末<sup>オチ</sup>がわかって焦っている。

「や、やめろおおおおおお！！」

ズドオオオオオオオオオオオン！！！！

レイリーのベレッタM950から放たれた銃弾はボンベに当たりそして（予想通り）爆発した。

「レイリー！！助けてくれ！！」

「はあ……」

レイリーは再びランエボ？に乗り込んだ。

## ガウルと共に(2)

レイリーはアクセルを踏む。ガウルの車は所々に穴が空いていた。バイクの集団はさつきよりも増えている。だがガウルが銃を乱射して蹴散らしていた。

集団の一人の手には携帯が握られ、何か話している。

「あれで増援を呼んでいるのか」

レイリーは銃で的確に携帯を撃ち抜く。

「ガウル！ こっ  
ちに来い！」

バイクの集団は何と手榴弾を持っていた。F355を爆風が襲い、コントロールを失っていく。

だがF355は何かこちらの道路に来ていた。ランエボ？もまた、爆風に襲われる。

「ガウル！ こっちに来るな！」

「てめえ！俺の命と車、どっちが大事なんだ！」

「車だああああああああ！！」

[illegible]

一つの手榴弾が飛んできた。レイリーはゴミ箱に捨てられていた弾のケースを持ち出した。

それはズシリと重く、中にはテープで固定された石が入っていた。普通、弾のケースはおもちやが入っていた箱を利用している。なぜかと言うと銃を売ると警察に捕まってしまうのでこうした箱を使っているのだ。最近、おもちや専門店がおもちやが入っているすべての箱を警察に調べられたのもこのせいである。

そしてこの箱はもとも重いものが入っていて、弾だけでは違和感を感じるのだった石でこまかすのだ。

レイリーはテープを剥がし、石を投げた。石は手榴弾に当たり、手榴弾が爆発した。

手榴弾はまだ集団の近くにいたのでほとんどの者が吹き飛んだ。

だが、また前から集団がやってきた。

「くそっ、きりがいい……ん？」

見るとガウルが右手でハンドルを操作しながらなにか探している。そして

「いい加減にしろてめえらああああああ！！」

そう言いながら何かのレバーを上げた。すると車の下から小型のガトリング砲が出てきた。カーナビは 視点がガトリング砲に変わっている。

「死にやがれええええええええええ！！」

そしてレバーについているボタンを押した。鉛達がバイクを襲う。だが集団はそれを察知したようにサイドに回った。

「ガウル！ 危ない！」

集団が一斉にF355に銃を向ける。だが、撃たれたのはF355ではなく集団達だった。

F355の後ろにはバイクが一つ。バイクにはFN P90を持った者がいた。

ちがう。ファルではない。むしろ下水道であつた男に近い体格をしている。

FN P90から5.7×28mm弾が放たれる。それは集団に的確にあたっていた。

地面を火花が散らす。約十人いた集団達はほんの数秒で倒れていた。

謎の者は向きを変え去って行った

「よくやった。報酬だ」

二人は封筒を受けとった。レイリーとガウルは目的地に着いていた。受取人は二人で防護服を着ている。

「ガウル。帰るぞ」

「おう！」

カチャ……

「帰ったぞ」

「依頼は？」

「ちゃんと済ませている」

「なら、夜を共に過ごしましょうか」

「ふざけるな。帰れ」

「まったく。冗談の効かない兄さんね」

ニルアは外に出て行こうとした。

「ニルア」

「何？」

「前から気になってたんだが、お前の職業は何だ？」

「フフ K O R O S I Y A」

ドタン！

「……ファル」

「何ですか？」

「お前ニルアのこと気になってるだろう」

「っ……」

## セーブ図書館

パタン。

レイリーは本をまた閉じた。これで10回目だ。

「まったく、これじゃあ朝早く起きた意味がないじゃないか」

レイリーは眠たそうな目をしていた。

「おい、ファル。何か分かったか」

「まったくです。それにしても、ヒューチャーチップって何なんですかねえ」

「それを調べるためにここに来ているんだろ」

レイリーはまた別の本を開いた。

「兄貴、なんでパソコンとか持っていないんですか」

「やる機会がないんだよ」

「もしかして、機械は苦手？」

「ち、ちがう！」

「それにしても、どんな物かもわからないのにどうやって調べるんですか」

ファルは頭を机に何度も打ちつけた。

「精神崩壊か？」

「できればそうなりたいです」

二人はまた本を手にした

ここはレブライトシティの東にあるセーブ図書館。人気はまだ5時にもなっていないので少なく、止まっている車も一つしかなかった。自動ドアが開き、ゾンビ……では無く、レイリーとファルが出てきた。明らかに疲れている。

「何にもわかりませんでしたね……」



「ああ……」（こいつと居ると調子が狂う……）

「早く家に帰りましょう、兄貴」

「わかってる」

ランエボ？に何か貼られている。

「ん……？」

無断駐車紙である。

「はい。次からは気をつけるように」

「すみません」

二人はカウンターから離れた。

「兄貴、なんで駐車場じゃなくて家の前に止めるんですか？」  
「ファルは完全にだらけている。」

「……」

「無視ですか」

二人は警察署を出た。

「はあ」

それ以上二人は何も言わなかった。その時、バイクがやってきた。バイクに乗っていたものはヘルメットを脱ぎ、レイリーを通り過ぎて行った。

だが、レイリーは見た。その者の右頬に何かで斬られた傷があるのを。

「っ！」

レイリーは振り向いた、だが、その者はすでに警察署に入っていた。

「どうしたんですか？兄貴」

「……いや、なんでもない」

二人を乗せたランエボ？は警察署から出て行った。

そして午後10時、ドアからノックの音が聞こえた。

「……客か？」

レイリーはドアを開けた。ドアの奥にいたのはコートに包まれた男だった。

「依頼だ、中に入らせてもらおう」

男はすぐに家の中へ入った。レイリーはドアを閉めた。

「依頼とは何だ？」

「ああ……」

男はソファに座る。レイリーは改めてその男の姿を見た。

男はフードを被りコートを着ている。さらにはサングラスにマスクを着けている。子供はほとんどこの男を避けるだろう。

「セーブ図書館の駐車場にこれを届けてほしい」

謎の男は出されたコーヒーを飲みながらトランクを渡した。トランクはとても軽かった。

「報酬は千万だ」

「こちらの最低金額は五千万円だ」

「……いいだろう。五千万だ」

男は家を出て行った。

「さて、ファル、行くぞ」

「わかりました、兄貴」

「

二人はランエボ？に乗った。

「そういえば、改めてみると車スツキリしてますね」

「……」（そういえば、俺が車を潰したのと言ってなかったんだな、ファルに）

「掃除でもしたんですか？」

「まあ、そうだ」（本当はもっと金のかかることをしたんだが）

ブロロロロ……

ランエボ？は路地裏を抜けた。

「まさか、一日に二回も図書館に行くとはな」

「でもキャラ的に合ってますよ」

「そう見えるか？」

二人はそんな話で車の中で暇な時間を潰した。

ランエボ？が止まった。二人は車から降りていく。駐車場にはコートを着ている男たちが沢山いた。

「トランクを開ける」

男はそう言った。

「なぜだ？」

「いいから早く開ける」

レイリーは渋々トランクを開けた。中には封筒が入っていた。

「どつりで軽いわけだ」

「封筒を開ける」

封筒の中には手紙が入っていた。

「手紙を読め」

手紙にはこう書かれていた。

レイリー様へ

あなたはヒューチャ チップを持っていますね。

私達はそれが欲しいのです。

あなたの家も知っています。

ですが家を襲うなどの派手なことはしません。

ですからあなたをここに呼びました。

今からあなたを殺してヒューチャ チップを奪います。  
悪く思わないでください。

目の前にいる男たちより

レイリーが顔を上げると男たちに銃を向けられていた。

「手紙は読んだだろ」

「くっ……罠か」

レイリーは死を覚悟した。だが、撃たれたのは目の前にいた男たちだった。

図書館の入り口に誰かが居る。

「図書館にきたお二人。パーティーへようこそ」

一斉に銃弾が男たちを襲う。数秒後、立っていたのは二人だけだった。

「では」

男は横にある路地裏へ走った。

「逃がさん」

レイリーはベレッタM950でそこにあるビルの屋上に置かれていた箱を撃ち、路地裏へ落した。

道はふさがれてしまった。

レイリーは銃を向けた。

「お前、なぜ俺たちを助けた」

## 強制終了

男は振り向いた。右頬にあの何かで斬られたような傷。

「やはりな……」

レイリーは右頬にいったん目を向け、再び男を睨みつける。

「知ってるんですか？ 兄貴」

「俺を襲ってきたやつだ」

「何だつて！」

ファルはFN P90を男に向ける。

「おいおい、俺は警察だぜ？」

男はレイリーとファルしかない事を確かめ、手帳を取り出し、レイリーに投げ渡した。

手帳にはビンズ警察庁 潜入捜査課 ブラウ・セイルドと書かれていた。

「スパイさ」

レイリーは手帳を男に投げた。

「ブラウと言うのか」

「ああ」

「そんな奴がなんで俺を襲った」

「あの時は俺は怪しまれててね。見張りの者がいたんだよ」

「今は？」

「お前を殺そうとした行動で見張りをやめた」

「そうか」

「兄貴。何の話をしているかまったくわかりません」

「わかった。説明してやる。まずは俺が」

～省略～

「へえ、レイリーさんが車を潰したとはねえ……」

「その話に関しては今後一切触れるな」

「はい」

「で、俺はお前を襲うかもしれないけどそれはそれで勘弁と言うことで」

ブラウは一つの紙を残して去っていった。

ファルはその紙を拾った。

私、ブラウ・セイルドは、あなた様方が危険に陥った時、助けにまいます。

レブライトシティ第7区5・14 ブラウ・セイルド

ファルはその紙をレイリーに見せた。

「こいつ……俺の家のすぐ隣じゃないか」

「ええっ!？」

二人が家に着くと物陰からあのファルに助けられた女がいた。(

## 第8話

「前はすまなかった」

「いや、良いんですよ」

「お礼をさせてくれないか？」

「ならば……パソコンは持ってるか？」

「ああ、ここに」

女は鞆からパソコンを取り出した。

「それがどうしたんだ？」

「ヒューチャーチップと言っのを調べてほしい」

「なんだって!？」

「ん？」

「なぜお前が……」

「知っているのか？」

「まあいい。調べてやろう……それなら、電気が必要だが」

「ああ、自分でや」

「俺たちの家に来てください」

「ああ」

レイリーはファルを殴った。

「へへ……悪かった？」

「当たり前だ」

レイリーは乱暴にドアを開けた。岩と岩が当たるような耳鳴りのする音が路地裏に響く。

「あ、ドアノブ……」

ファルが見たのはドアノブが凹んだ姿だった。

「あとで買っとけばいいだろ」

レイリーは早く女に出てほしいらしい。

「つたく……レイリーめ……」

その時ファルは口を押さえた。レイリーを呼び捨てで言ったのだ。

「もういい。その呼ばれ方は嫌いだ」

「ならレイリーさんにします」

レイリーは壁を蹴った。ファルは思った。

相当イラついていると。

ファルはそれ以上何も言わなかった。

これ以上口を挟むと9mmパラベラム弾が飛んでくるかもしれないからだ。

ついにレイリーが口を開けた。

「ファル。パソコンのコンセントを繋いでやれ」

ファルは少々震えながらもコンセントを繋いだ。

「お前……無線だろうな」

「ああ」

有線だったらどうなったかは想像しないでおこうとファルは思った。

パソコンの起動音が鳴った。

エラー音は鳴らないようにと祈るファル。

ソファーに座りながら貧乏揺すりをするレイリー。

器用に指を動かす女。

だが女があるサイトをクリックすると画面が最初の物になった。

「どうやら……強制終了されたらしい」

ズガン！

レイリーが机にかかと落としをする。ファルは黙って立ち、部屋の角に座り込んだ。

「違うサイトをクリックしろ」

「いや、あのサイトしかなかった」

ズガンズガンズガン！！

ピシッ……

机にひびが入る。

「私ならハッキングもできなくもないがどうする？」

「やれ」

女は鞆からディスクを取り出した。



「さてと……」

女は座りなおした。どうやら本気らしい。

指が触手のように動く。女がタイピングの大会に出ると必ず優勝するだろう。

「こいつは厄介だな」

「なぜだ？」

「まずその強制終了させるシステムを弄ろうとしても約百個のシステムがブロックさせている」

「……と言うと？」

「一つ一つブロックを解除しないと駄目と言うことだ」

ゴン！

レイリーの次のやつあたりのターゲットは棚に決まったらしい。棚が壁に当たる鈍い音がファルの耳に入る。

ドストドストドスッ！！

ファルによってレイリーの八つ当たりは強制終了してしまった。

## 生肉

カタカタカタカタ……

レイリーはその音で目を覚ました。午前十時。ひさしぶりの通常の起床時間だ。

あのときが懐かしいと思いながらレイリーはキッチンのほうへ目を向ける。

そこにはファルがいた。朝食を作っているらしい。

目の前には女。まだパソコンを触っていた。右にはコーヒーが注がれたカップに左には大量の紙。

（この女、寝ずにやっていたのか……）

「どれくらい進んだんだ？」

「まだ半分もいつてない」

レイリーは体を起こし、ソファに座った。リモコンを手にして電源を付ける。

「この時間帯はドラマの再放送がやってますよ」

ファルが言ったとおり、学園モノのドラマがやっていた。

「……嫌いでは無いな」

それから五分。家から聞こえてくるのは料理の音、パソコンのキーボードをたたく音、テレビの音しかなかった。誰も言葉を交わさない。

「朝食、できましたよ」

テーブルにはパスタが盛られた皿が三つ。

（三つと言うことは……）

「ティアさんも」

（やはりな）

ここにはレイリー、ファル、女の三人しかいない。ティアというのが誰かはすぐにわかるだろう。

「あとで食べる」

ティアが言ったのはその一言だけだった。一瞬目を向けながらレイリーは朝食を食べ始める。

ファルは手を合わせるとすぐにパスタを大きな口に押し込んだ。

「御馳走様」

最短記録38秒を抜いて35秒。最近どんどん食べるスピードが速くなっていく。近々喉を詰まらせるんじゃないかとレイリーは心配していた。

ファルは皿を片づけた。

「買い物に言ってきます」

「俺も行こう」

レイリーは朝食を食べたら暇になるのでそう言っておいた。

「じゃあ食べきるまで待っておきます」

ファルはソファに座り、ドラマを見る。

ドラマでは一人の男が不良たちをなぎ倒していくシーンが映っていた。それを見てファルは、「俺もこんな人になったらなあ」と、そんな風に言いながらテレビに釘付けになっていた。

「御馳走様。行くぞファル」

レイリーは玄関に行ったが何かを思い出して、また部屋に戻ってきた。

「どうしたんですか？」

レイリーは掛け布団をティアに渡した。

「毎晩寝ずにやれと言っほど、俺は鬼じゃないからな」

カチャ……

外では一人の子供がランエボ？の前で遊んでいた。

レイリーはランエボ？に乗ると「どけ」と一言だけ言った。

子供は逃げていき、ファルが乗り込もうとした。その時、

ドゴッ……

ファルが地面に手を着く。その後ろには不良たち。一番前にいる不良は言った。

「よくも俺の弟に偉そうにしゃがったな。痛めつけてやるよ」

「ふざけるな」

「っ!？」

ファルが起き上がり、一番前にいる不良にアッパーを喰らわせる。不良は宙を浮いて後ろの不良たちにぶつかり、将棋倒しになってしまった。

「行くぞ」

「わかってます、兄貴」

（こいつ、呼び方が変わってないな）

ファルは車に乗り、路地裏に抜ける直前に子供に「ごめんな」と言った。

ブウウウウウン

ランエボ？は車がまだ多い大通りを走る。

「最近依頼が来ないですね」

「そうだな」

「貯金とかはしてるんですか？」

「いや寄付している」

「優しいんですね」

「他に使い道がないからな」

「最初に会ったときはそんな感じがしませんでした」

「外見と言うのは怖いものだ……」

「……………あの人、カッコ良かったなあ」

「誰のことだ？」

「ほら、あのドラマで不良を一人で倒していった男がいたでしょ？

あの人ですよ」

「そうか？」

「え？」

「現実的に見れば隙だらけだ。相手もたまったもんじゃないな」

「そうですか」

「だが、お前の出したアッパーはなかなかのものだったぞ」

「あ、ありがとうございます」

信号機が赤になった。

「……そういえば、何に寄付してるんですか？」

「……………」

「兄貴？」

「軍事開発」

それから約十分たつてファルが強盗をしようとしたあのデパートに着いた。

「本当に……ここなのか？」

「はい」

中は昼食の材料を買いにきた者で混雑していた。食料品売り場は特に人が集まっている。

「何を買うんだ？」

「兄貴は豚肉の薄切りを2個と卵を1パック買ってきてください。すぐにそちにきます」

「わかった」

レイリーは食料品売り場に行った。

「人が邪魔だな……」

レイリーは人の波を掻き分けて肉置き場に着いた。服はしわだらけになっている。

「これか」

レイリーは目の前にある牛肉を取ろうとしたその時、右から白い手が出てきた。牛肉、豚肉、鶏肉など種類をお構いなしに取っている。だが、調理済みの肉は取らなかった。

（いったい誰なんだ？）

レイリーは後ろを振り向いた。そこには男が立っていた。

男は猫背になっていて何を考えているかわからない黒い眼に、青い帽子をかぶっている。

「なんですか？」

「いや、なんでもない」

「兄貴」

ファルが駆けてくる。男は既に居なく、肉を取ったときには生肉は半分以上無くなっていた

ガラガラガラガラ………

「おい！早く肉を運べ！」

トラックから段ボールが届き、従業員がそれを荷台に乗せてデパートに運んでいる。

「生肉だゝいすき」

男は袋からパックから生肉を出してそのまま食べてしまった。

## 別の意味の死（前書き）

ひっそりぶりに小説書きました。

## 別の意味の死

レイリーは夕食を食べ、入浴をしていた。もう依頼は来ないだろう。レイリーには休む時間などほとんどなく入浴だけが至福の時間と言ってもよい。だが、その至福の時間はある女に消された。

「さて、私の依頼はこの木箱を運ぶことなんだが

」

そう、この女。レイリーが入浴時間に来たこの女だ。レイリーはすぐに浴室を飛び出し衣服に着替えなければならなくなり至福の時間を消されて少し憎悪を持っている。

「……聞いているか？」

「ん？ あ、ああ」

「それで場所はプリベロン通りの近くにあるフィガ 警察署なんだが、できるだけ警察に見つからないでほしい」

「なぜだ？」

「それは秘密だ……さて、私はここを出る。十二時までには到着してくれよ。もし遅れたら

」

「俺の命はない」

「分かっているようだな。では、頼むぞ」

女は家を出て行った。

チッ

チッ

チッ

コトッ

レイリーは予備のマガジンに弾を入れ、机に置いた。

「兄貴。準備は出来ましたか」

「ああ、今行く」

そして、ポケットに入れ、ホルスターにベレッタM950とベレッタM8000を仕舞う。



「ぐ……結構重いな……こんなものをあいつは持っていたのか……」  
そして女から渡された木箱を抱え、ファルと家を出た。

レイリーはもう一つのポケットから車のカギを取り出し、ファルに投げ渡した。

そして開いたトランクに木箱を入れる。

急にエンジンがかかった。

「おい。勝手にハンドルを握るなよ」

「わかってます。ただバイクしか乗ったことが無くて……」

レイリーがランエボ？に乗り込むとファルは予備のマガジンに弾を入れていた。

「ったく。家でやれよ」

レイリーはレバーを変え、アクセルを踏んだ。

ブロロロロロロ……

「さっきから変な音がしないか？」

誰もいない大通りを車で走りながらレイリーは言った。

「え？ どんな音ですか？」

「ほら、よく聞いてみる」

ゴン      ギン

「あ、本当だ」

「まさか……荷物が暴れてる？」

「見てきますか？」

「……ちよつとまで」

「なんですか？」

「奪い屋だ」

横の細い道からバイクの集団が出てきた。また新しい奪い屋がこ

の街に訪れたのだろう。

バイクの集団はランエボ？の前方を走る。ファル側の窓が開いた。  
「ファル、今から飛ばす。準備はいいか？」

「っ……はい」

ファルはP90を持った。レイリーはそれを確認し、アクセルを思いっきり踏んだ。

ランエボ？はバイクの集団を抜き、すぐにファルは身を乗り出してFN P90でバイクの集団を撃つ。

「あいつら、配達屋だ！！」

バイクの集団達ほとんどが銃弾を避けていた。そして拳銃を取り出し、ランエボ？に撃ってくる。

「コラ！ 新品に傷をつけるな！！」

レイリーはサイドミラーで敵の位置を確認し、ベレッタM950で撃つ。だが、さつきと同じようにバイクの集団達はそれを避けていた。

「くそっ！ ファル、一気に勝負を決める。後ろの座席に移ってくれ」

レイリーがボタンを押し、後部座席の窓を開ける。

その時、何か小さい物が車の前に落ちた。

「やばい！ 手榴弾かよ！！」

レイリーは瞬時にきたハンドルを右に回す。だが爆風に耐え切れず、ガードレールに衝突してしまった。

「兄貴！！ しっかりしてください！！」

「今度の奪い屋は少し手強いな……っ、そんなこと言っんならお前がやれ！！」

レイリーがアクセルをさらに踏んだ。そして、交差点でレイリーはハンドルを右に回しながらブレーキを踏んだ。ランエボ？はスリップし、

バキッ……

横に止まる。

「今だ！！ 攻撃しろ！！」

ファルはP90を窓から突き出した。ファルの目に映ったのは手榴弾。

ズドオオオオン！！

手榴弾はランエボ？の手前で爆発する。どうやらレイリーがレベッタM8000で相殺させたらしい。

「早くしろ！！」

ファルは引き金を引いた。幾つものバイクが爆発し、残りの集団は逃げて行ってしまった。

「やっと終わりましたか……」

「ああ……」

「……そういえば、さっきバキツとか言う音してませんでしたか？」

「いや……聞いてなかったが……」

「……ちよつと見てきます。木箱とかが割れた音かも知れませんが……」

（それはないと思うが……）

ファルが車を出てから二分。

「あ……兄貴……」

「何だ？」

「ちよつと……来てください」

レイリーはランエボ？を降りてトランクに向かった。ファルが震えている。レイリーが見た物は

時限爆弾である。

「ああ、約束の時間を過ぎたら、別の意味での死か。」

「そんな冷静に言っでどうするんですか！？ 早くしないと俺達爆死ですよ！？」

「なら急げばいい話の事だろうが」

（こんな冷静に言う兄貴って怖い……）

二人は違う木箱に時限爆弾を入れてランエボ？に乗った。今、午後11時37分。

## 焦り

爆弾を見つけた前よりもレイリーは急いでいた。

角に曲がるときは出来るだけスピードを出して曲がり、直線の時には100キロを超える速さで走る。安全運転とはほど遠く離れたものだ。

目的地までおよそ1キロ。現在11時40分。目的の時間まで20分。目的の時間〃爆死。

ファルはレイリーが焦っていることがわかっていた。いくら冷静な事を言っても死は怖いものである。

「目的地はまだか……」

「兄貴、そんなに急がなくてもすぐに着きますよ」  
だが、その考えはすぐに否定された。

「っ！？兄貴……」

「どうやら俺たちは神に嫌われているようだな」

「どうして……こんな所で……」

ランエボ？は角をまがった瞬間止まった。なぜならかなりの渋滞が続いてあるからである。

ここは人通りが少ない道路だが渋滞が続いている。普通こんな状態はあり得ない。

「違う道で行くと最低30分はかかるな」

「そんな……」

その時、横に赤いインプレッサSTiが並んだ。

「レイリー、ここは渋滞だ。信号がおかしくなっているらしい。ここをどうしても行きたいんだったら交通整理をするか？」

ブロウだった。

「……お言葉に甘えよう」

「その言葉を待ってました」

ブロウは車を止めて奥へと向かった。

「何で俺たちがここにいてることを知っていたんですかねえ……」  
「たぶん発信器でもつけられているんだろ」  
二人は待つことにした。

タツタツタツタツ……

「渋滞はひどく無いらしいな」  
ブロウは走りながら誘導棒を取り出してスイッチを押した。  
「おい！ 早くしてくれ！！」  
そんな声がいくつも聞こえる。  
「……これが渋滞の原因が………」  
ブロウは交差点に止まり、信号機を見た。  
信号機はどちらも赤だった

「すまないな。ブロウ」  
ブロウは誘導棒を仕舞ってインプレッサSTiに乗り、ランエボ  
？とは反対方向に走って行った。

レイリーはアクセルを踏み交差点を抜けていく。

「兄貴。荷物が時限爆弾だとしたら目的地の警察署で爆発するって  
ことですよね」

「その可能性もあるな」

「俺たち逮捕されないですよ」

「大丈夫だ。普通はその依頼を頼んだ者が逮捕される。俺たちはそ  
の場合被害者の扱いになる。俺たちは何にも関係ないと言うことさ」

「良かった……」

「……それより、銃を出せ」

「……え？」

「俺たちは神にとことん嫌われているようだ」

ファルは後ろを見てみた。そこには奪い屋がいた。

ズダダダダン!!

「今何時だ!!」

「後三分です!!」

「くそっ……」

レイリーは必死に奪い屋たちを殺そうとしていた。そうしないと自分たちが死んでしまうから。

奪い屋たちはさっきと比べては減っているが、放たれる銃弾は増え続けている。

何回角を曲がっただろうか。おそらくまだ半分も進んでいないだろう。

「……ファル。お前はここに残れ」

「えっ……」

レイリーは気付けば木箱を持って外に出ていた。

「兄貴!？」

そして奪い屋の一人を撃ち殺し、バイクを奪った。  
「もし俺が死んだら、その車は頼むぞ」

ブオオオオオオン!!

バイクは去って行った。

「……………兄貴iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!」

その直後に聞こえる爆発の音。ファルは何分も車で待ち続けた。もしかしたら目的の時間を過ぎて爆死したかもしれない。

奪い屋たちに撃ち殺されたのかもしれない。

兄貴は死んだのかもしれない。

俺はこのままずっと一人なのかもしれない。

もう兄貴は帰ってこないのかもしれない。

ファルはエンジンをかけた。

「おいおい。俺を置いて行かないでくれよ。」

「　　っ!?!?」

ファルが見たのは血だらけになったレイリーだった



ワルサーWA2000とベレッタM8000

「報酬、最近医療費にばかり使ってるなあ……」

ファルは皿を洗いながら呟いた。レイリーは家にいない。病院で治療してもらっているからだ。レイリーが入院して六日。レイリーの傷は全治一週間なので後一日でレイリーが帰ってくる。その間は貯めていた金で生活していた。

そして午後三時。ファルが夕食の材料を買いに行こうとした時、事件が起こった。

ファルがドアを開けて路地裏から出ようとした時、大通りからやってきた軍用トラックが出口を塞ぎ、中からスーツの者たちが出てきた。ファルはすぐに物陰に隠れる。

「あいつら……また来やがったのかっ」

ファルは今P90を持っていない。だが、ベレッタM8000を隠し持っていた。

時は遡り、五日前。

ファルは病院に見舞いに行っていた。

コツコツコツ

看護師がファルの横を通り抜ける。ファルはレイリーの居る503号室に向かっていた。

「しかし、患者多いな……」

ここは治安が悪いレブライトシティにあるので、患者も多いのだろつ。ファルは少し戸惑っている。

「あ、あんたは！！」

椅子に座っていた老人が驚きと恐怖に満ちた顔をして杖を突きながら逃げ去って行った。ファルはあの老人の事を覚えている。昔、まだ奪い屋だった時に襲った者だ。その時は足は不自由では無かった。

「くっ……」

ファルは俯きながら503号室に入って行った。

ガラッ。

「兄貴、見舞いに来ましたよ」

「ああ、すまないな」

ファルは袋を机に置いて椅子に座った。

「ケガはどうですか？」

「ああ、医師は全治一週間と言った。俺はすぐにでも退院できるのにな」

「無理は禁物ですよ。兄貴」

「……銃は？」

「あ、はい」

ファルは箱を袋から出し、箱からベレッタM950を取り出した。  
「本当にこれだけで良かったんですか？」

「ああ。もう一つはお前に預ける。失くすなよ」

「わかってます」

「そう言えば、ハッキングは後どれ位かかるんだ？」

「兄貴が退院するまでにはもう終わってると思います」

「あいつは謎だらけだからな。早く出て行ってもらいたい」

「退院する時、迎えに行きますか？」

「いや、いい。自分で帰るよ」

「わかりました。じゃあ、俺は家に帰ります」

「じゃあな」

ファルは内ポケットからベレッタM8000を取り出した。予備のマガジンは一個。弾は全部で合わせて22発である。

それに対し相手は10人。約二発で相手を倒さなければいけない。男たちはノックをした。もうすぐティアがドアを開けるだろう。

ガチャッ……

ティアがドアを開けた。男たちはティアにハンカチを被せて眠らせる。

「睡眠薬か……？」

男たちは眠らせたのがレイリーとファルの二人以外の者なので焦っている。

「おいおい、どうする？ 無関係のやつをやっちまったよ」

「……後に警察に報告されるかもしれない。殺しておこう」

一人の男がティアの口に銃を押し込んだ。ファルは咄嗟に飛びだした。

ダンッ！

ファルはティアに銃を押し込んでいた男の頭部を撃った。男の後頭部は吹き飛び、破片が地面に散らばる。

「誰だ！？」

男たちは警戒態勢に入った。ファルは駐車していた車の物陰に隠れる。

ファルは音を立てずに仰向けになり車の底から見える男三人の靴を狙い撃った。

その男たちは倒れて足を抑え、銃声を聞いて男たちがこちらにやってくる。見つかるのは時間の問題だ。だがその時、こちらにやつ

てきた男たちの一人が何者かに狙撃された。男たちは驚いている。

狙撃したのはブロウだった。

家の屋上にいたブロウは持っていたワルサーWA2000を装弾して標準を次の標的に合わせる。

男たちはまだブロウがどこにいるのかが分からない。

また一人男が狙撃された。男たちは混乱して銃を乱射している。

同士討ちで男が四人死亡した。後三人。

ファルは車から飛び出して二人を撃った。

男は自分一人だけだと気づき、銃を捨て逃げようとしたがブロウとファルは逃がさなかった。

ズダァン！！

最後の男の一人が両胸を撃ち抜かれてその場に倒れてしまった。ブロウは天窓から天井を降りた。

ファルはティアの所へ向かって行った。

## ハチの巣からの脱出

「何なんだあいつらは……」

レイリーはH&K MP5を片手に、物陰から前にいる武装した警官たちを見つめていた……

時は遡り、五分钟前。

レイリーは病院の一室で寝そべりながら窓の向こうを見ていた。今日は退院の日。もうすぐ医師が来るだろう。

だが、来たのは医師ではなく、武装した警官だった。

レイリーは危険を察知し、転がりながら床にと落ちた。

その直後、銃弾がベッドを襲う。床に逃げていなければ、今頃ハチの巣にされていただろう。

レイリーはベッドの底を這いずって右手で隠し持っていた銃を取り出し、警官の足を撃つ。

警官は倒れ、足を抑える。だが、片手で腰につけていたサブマシンガンを持った。

だがその時にはレイリーが警官の両手に二発づつ、銃弾を撃ち込んでいた。

「もっとマガジンを持つておくべきだったな」

レイリーはベレッタM8000を仕舞い、警官が持っていたサブマシンガンを拾った。

「これは……H&K MP5だな」

レイリーは服を着替え、それを持って、引き戸を静かに開けた。外には警官はいなかった。だがレイリーが見たのはその周りにある物だった。

所々に多数の穴が開いた人たちが倒れていて、今も絶えず血を流し続けている。

さらに壁にも無数の穴が開いており、罅が所々に入っていた。

まさに蜂の巣である。この様子だと、この先もほとんど穴だらけだろう。

タッタッタッタ……

レイリーはそのような足音が確認できたのですぐそばにあった棚に隠れた。

来たのは警官たちだった。もちろん武装している。

「頸飾りの男を探せ！！」

「……俺のことか？」

「

そして今。警官たちは少しずつレイリーに近づいていた。このままではいずれ見つかってしまう。先手を打たなければ。レイリーは片手を出して警官たちに銃弾をばら撒く。

警官たちはバタバタと倒れてしまった。レイリーは警戒しながら警官の持っていたH&K MP5のマガジンを抜いてベルトに挟ん

でおいた。マガジンに入れていたのは9？パラベラム弾だった。

「……まあ当たり前か」

レイリーは通路を進み、角の所で先の様子を伺いながら進んだ。

「誰かいるぞ！！」

後ろに警官が来たらしい。レイリーはそこにあつた車輪付きの担架を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた担架は警官たちに直撃し、レイリーは警官たちの頭に向けて発砲した。

警官たちは頭を撃たれてその場に倒れ、レイリーは警官の持っていたマガジンを抜き、ベルトに挟む。

「弾には困らないだろうが……他にも何か持っていたよさそうだな」

レイリーは警官たちが持っていたアサルトライフルを拾った。

「……M16か」

レイリーは他の警官のM16のマガジンを奪い、ベルトに挟んだ。

現在、H&K MP5のマガジンが八個。M16のマガジンが五個。

「手帳……？」

レイリーは倒れている警官の胸のポケットの仕舞われている手帳を抜き取った。

「ファイガー警察署……これは俺が前向かつた所……」

レイリーがこの場所に運んだのは時限爆弾。

「……クソッ！！復讐か！！」

レイリーは壁を殴った。そして床にいた警官を蹴る。

「……早く脱出しないとな」

レイリーはM16を両手に次の角へと進み、角の奥を覗き込んだ。「被害にあつた割には敵の数が多いな……他の警察署も俺を狙ってなければいいんだが……」

角の奥に敵は二十人ほど、とても倒せる相手では無い。

「迂回するか……階段を使おう」

レイリーは振り返った。そこにはナイフを持って走ってくる警官。警官はナイフを振り下ろした。レイリーは横に避け、M16を手放して鳩尾に膝蹴りをし、ナイフを奪って相手の左胸に刺す。

警官はその場に倒れ、レイリーはナイフを抜いて床へと投げ捨てた。

レイリーはM16を拾って奥に走る。

「今のは何だ!？」

後ろから男の声が聞こえる。どうやらさっき男が倒れた音に気付いたのだろう。

「やり過ぎなければな……」

レイリーはドアが開いていた部屋へと入った。

数秒後、二人の警官がその部屋へと入る。

一人の警官がベットの布団が不自然に膨らんでいることに気付いた。

そして警官がナイフを取り、ベッドに近づいた。

ザクッ!!

「……ちっ、誰もいねえか」

ナイフが刺さったのはただの布団の塊だった。警官二人は部屋を出て行った。



「もう出て行ったか……」

レイリーは窓の外で窓の縁につかまりぶら下がっていた。

レイリーは窓をあけ、部屋へと入って行った。

## V S 偽警察

病院の外ではパトカーが数台、そして扉にはSATがいた。

「突入！！」

SATは中へと入って行った

レイリーは階段の近くで交戦していた。警官の数は七人。空葉莢を排出しながらブライドは鉛を警官にばら撒く。壁は穴だらけだった。

警官は物陰に隠れて鉛を防いでいた。そしてM16でレイリーを撃つ。

レイリーも物陰に隠れ弾を避けていたが、時々手榴弾を投げてるので、いちいち場所を移動しなければならなかった。

「このままでは弾が切れてしまう……やばいな」

レイリーはM16のマガジンを取り換える。最後のマガジンだ。その時、ドサツと、人の倒れる音。

レイリーがゆっくりと物陰から階段を見ると倒れた警官とSATの姿だった。

「この階を制圧するぞ！ 生き残りを見つけたら確保しろ！」

「警察が警察を殺すとは……どういうことだ？」

「っ！？ 誰だ！ 手を上げて出てこい！」

「……チッ」

レイリーは手を上げ、SATの視界に入った。

「武器を捨てろ！！」

右手にあつたM16を地面に置いた。

「偽の奴らではなさそうだが……お前は何者だ？」

「入院してた患者だ。脱出を図ったんだよ」

「それにしても武器に使い慣れている様子だが……職業は？」

「……配達屋だ」

「ほう……黒の配達屋か……敵でも味方でもないな」

「助けるよ、S A Tなら」

「いや、すまないが手を貸してくれないか？」

「報酬はないのか？」

「……ちよつと待て」

S A Tの隊長らしき者は無線機を取り出した。

「こちら制圧一班。聞こえますか」

数十秒後、その者は無線機を仕舞った。

「手伝ってくれたら報酬をやるう」

「なんでも屋では無いんだがな……まあいい」

レイリーはM 1 6を拾い、S A Tについて行った。

レイリーとS A T達は通路を駆けていた。

「あいつらはいったい何なんだ？」

アンチポリス

「偽警察さ」

「偽警察？」

「警察の管理が放置されることで生まれてしまった物だ。ほとんどが暴力団で構成されていることが多い。まだ残っていたのか……」

「と言うことはファイガー警察署は正式には存在しないと言うことか」

「そう言うことだ」

（なら、あの依頼者は偽警察を潰すために……？）

レイリーが依頼者を思い出していると前から偽警察がやってきた。

「S A Tだ！ 片付ける！！」

「標的確認。排除する」

バラバラバラバラ！！！！

SATはライオットシールドを持っているので物陰に隠れなくても大丈夫だが、レイリーはそんなものを持っていないので、物陰に隠れるしかなかった。

「回り込むぞ、ついてこい」

レイリーは立ち上がり、少数のSATについて行った。そして右に曲がる。

もう一度右に回ると、こちらに背を向け交戦している敵の姿が見えた。

「撃てー!!」

レイリーに呼びかけるように隣の隊員が言う。

レイリーはM16で敵の背中を次々と銃弾を撃ち込んだ。

「ぐおおおお……」

偽警察達はバタバタと倒れて行った。

「制圧一班制圧完了。これより、上の階を制圧する」

隊長は無線機を直し、階段へと走った。

「GOGOGO!!」

SAT達は階段を駆け上がって行った。レイリーはM16のマガジンを偽警察達から奪い、SATについて行った。

階段の上には偽警察。SATは拳銃で対抗していたが劣勢だった。レイリーはM16を持って階段でSATと共に偽警察を撃つ。だが相手は階段の隙間から撃っていて、こちらの攻撃はほとんど当たっていない。レイリーはM16をベルトに仕舞い、ベレッタM8000を取り出した。

「ライオットシールドを貸せ!!」

「お、おう……」

レイリーはSAT隊員からライオットシールドを半奪うとそれを持って階段を駆け上がって行った。

パンパンパン！！

三つの破裂音と共に、三人全ての偽警察が血を噴き出しながら倒れた。

レイリーはSATにOKサインを出し、SAT隊員にライオットシールドを返して通路へと駆け込んだ。

「ここで最後だ」

レイリーはM16を取り出し、通路を駆けて行く

「ぐおおおつ」

偽警察の最後の一人が断末魔を上げて倒れる。

「制圧一班、制圧完了。戻るぞ」

SATとレイリーは階段を降りて行った。

「これが報酬だ」

「……少ないな……これだけか？」

「ああ、そうだ」

「まあいい。俺は早々に立ち去らせてもらっつよ」  
レイリーは病院を去った。

脅し

レイリーはファルとパソコンを見ていた。ハッキングが完了したのだ。

「ご苦労だった」

「後で報酬します!」

ティアはカフェオレの入ったカップを飲み干し言った。

「        本当か?」

「俺は払わんぞ」

「兄貴!! そんな冷たいこと言わないでくださいよ!!」

「俺は払うと言っていないし払う気でもないしファルが入れたんだから俺は関係ない!」

「ならパソコン見ないでください。関係ないので」

ファルはその巨体でパソコンに覆いかぶさるようにしてレイリーが画面を見れないようにした。

「いや、そこは見せてくれよ」

視点を次々と変えてパソコンの画面を覗こうとする強情者<sup>レイリー</sup>

「なら報酬払いましょう」

「無理だ。だがパソコンは見せてくれ」

「そんな考えが俺に通用すると思っっているんですか?」

「ああ」

「よくそう思いますね。まあいいです。こちらから渡しておきますよ」

「        ちっ」

ファルがパソコンを見せるとレイリーはマウスをファルから奪ってパソコンの画面を覗き込んだ。

パソコンにはこう書かれていた。

## ○ヒューチャーチップ

ガミライス博物館に保管されていたチップ。元々は隕石が地球に直撃するのを防ぐ装置である。

フェガル地方のチレシテイの町はずれにある台座にはめ込むと、予備レーザーが照射され、我々が開発した人工衛星に直撃し、そこから本レーザーとして宇宙に放つ。

ただし、12月31日には起動させてはいけない。

本レーザーは地球を破壊するほどの威力を持つ。

ヒューチャーチップはとても硬い金属でできており、破壊することは不可能に近い。

ヒューチャーチップの居場所はレブライトシティ第五区5-24。

なお、本レーザーを12月31日に照射すると地球を破壊させてしまう。

ヒューチャーチップはふつつ頸飾りになっており、ヒューチャーチップを取り出すには「未来の最後の武器」と音声パスワードを入力しなければならぬ。12月29日居場所を襲撃。

レイリーは頸飾りを手に乗せた。

「……未来の最後の武器」

頸飾りが開いた。なかに銀色のチップ。

「これがヒューチャーチップ……」

ティアはヒューチャーチップをずっと見続けていた。

「……今日に襲撃するのか……いいだろう。敵の本部を叩く。ファル、行けるか？」

「はい!!」

「私も行かせてくれないか？」

「……どうして」

「それなりの理由があるのでな」

「足手まといになるなよ」

「わかってる」

三人は敵の本部に向かうことを決めたのだった

。

「いいか。全員を殺すなよ」

「わかってますよ兄貴」

三人はレイリーの家の向かいの物陰に隠れ息を潜めて、一時間ほどどスーツの者たちが来るのを待ち続けた。

「これ、うまいですね。兄貴、どこで買ったんですか？」  
種類豊富なパンを食しながら。

「……ティアに聞け」

「ここから大通りに出てすぐ右に行くとレブライトベーカーリーという店があった。」

「へーそうなんだ」

「……来たぞ」

三人の目線の先に軍用トラック。その中から標的が十人ほど出てくる。

「俺が奇襲をかけるからそれを合図に攻撃しろ」

「了解」

ダンッダンッダンッ！！

ベレッタM8000を相手の頭に撃つ。それと同時にベレッタM950の銃弾、FN P90の銃弾が相手の頭を破裂させる。

相手は反撃ができず、怯えている一人を残して全員が銃殺された。レイリーは残った一人の胸倉を掴み、喉に銃を突きつけた。

「た、頼むっ！！ 命だけは！！」

「お前たちの本部を教えてもらおうか」



「そ、それはっ……」

「言え！！ 言わないと脳幹に二発撃ちこんで頭部を破壊して脳味噌や血を外にさらけ出して大通りに捨ててやるぞ！！」

（兄貴、よくそんなこと言えますね……）

「い、言います言います！！ チレシティの第一区のカイザビルです！！」

「…… 本当だな？」

「本当です！！」

レイリーは喉に突きつけていた銃をホルスターに仕舞った。

「うわあああ！！」

その者は大通りに逃げ去って行った。

三人は飛行機から人混みに紛れて降りていた。空は雲が一つもなく、青一色。遠くには飛ぶハトも見える。滑走路には砂があり、風が吹く度、砂が眼の中に入りそうになる。

「しっかし、こんな遠いところからやってくるなんて御苦労様ですね……」

ファルは左手で顔を半分覆いながら言った。

「そこまで時間をかけてやってくると相手は多分本気だな」

三人はレブライトシティから12時間かけてやってきたのである。およそ10000kほどことレブライトシティは離れているだろう。

乗客と一緒に滑走路を離れ、航空のカウンターまで戻ってきた。

カウンターには沢山の人が並んでいて、一人が倒れるとドミノ倒しになりそうだった。

「おみやげとかあるっすかねえ……」

「今はそんなことしている場合じゃない」

「やっぱそうっすよね」

ティアは黙ったまま歩き進んでいる。ファルはおみやげ（特に菓子類）に眼がいついていて、気付いていない。だが、レイリーは少し気になっていた。

「……ティア」

レイリーがティアに声をかける。

「なんだ？」

ティアはすぐにレイリーの向きに顔を向けた。

「ここの街は知らないのか？」

「何回もいったらう。私は知らない」

「兄貴、これからどこへ行くんですか？ まだ店の場所は知らないんですけど……」

「ああ。空港の向かいにあるデパートの地下4階にあるらしい」

「空港の前にデパートですか……産地直送みたいなもんですかね…

…」

今から半日前、レブライトシティを旅立つ数分前の話である。

レイリーはタクシーに乗ったティア、ファルを残してダフストの店に来ていた。もちろん、ランエボ？は乗らない。チレシティは海の向こうにある。くやしいが、車で空は飛べないのだ。

勿論、フェリーで移動する手段もある。だが、レブライトシティは近くに海が無く、車で海岸まで行こうとすると最低一日はかかり、さらにフェリーは一週間に一回しか出ず、もうフェリーが出る日は越えているのである。移動手段はもう旅客機に乗るしかない。

レイリーはその事を考えると、ランエボ？が居ないせいか寂しくなる。その気晴らし、また、他の理由でダフストの店に来たのだ。

「おう、いらつしやい」

ダフストがそう言ったが、レイリーは返事をしない。

「おいおい、どうしたんだ？」

ダフストは何か違和感を感じているらしい。そしてレイリーは初めの言葉を言った。

「チレシティに、武器屋を知っていないか？」

それが別の理由だった。空港に銃は持って行けない。たとえ黒の配達屋だとしても。最近ハイジャックも多いので、そのせいでもあるだろう。なので、チレシティで武器を調達するのだ。

「チレシティって……随分離れたところだなあ……」

「ああ、そこに用事があるんだ」

「用事ってなんだ？　そこまで遠い所に行くんだったら大きいだろうが……」

「別になんでもない……」

「……まあ、別にいいさ。で、武器屋、だったね……」

「ああ、知らないか？」

「たしか、古い友人がいたような……」

「どこだか、知ってるか？」

「うゝむ、そいつの電話番号は手帳に書いているような気がするな。少し、いや、気楽に待っててくれ」

ダフストはカウンターの後ろにある小さな扉を開けて奥に向かって行った。

そこらじゅうに並べられた拳銃やサブマシンガン、ライフルを眺めながら、レイリーはじつとしていられない様子で歩き回っていた。そして片足で地面を軽く踏みながら部屋の片隅に置かれたソファ―に腰を下ろす。だが足踏みは直らなかった。

「まだかー！ ダフストー！！」

ついに我慢できずレイリーは声を上げてしまった。待て待てと奥から小さな声が聞こえる。

それから一分後、奥からダフストがやってきて、小さな紙をレイリーに渡した。

「チレシテイ、第一区、キザデパートメントストア、地下四階……」

「ああ、あいつはチレシテイの空港の向かいにあるっていった」

「わかった。すまない」

レイリーは立ち上がりこの場所を去ろうとする。

「待て」

レイリーは振り返った。

「何をやるのかは知らないが、死ぬなよ。お前は店のお得意なんだからな」

「当たり前だ」

「」

レイリーは二人が待っているタクシーに向かった。

「……早く行くぞ。ダフストの古い友人が待ってる」

三人は空港を出た。すぐ近くには大通り。それを跨いで、向かいにあるおよそ五階建てのデパートに入った。

ガヤガヤガヤガヤ

中には人がレブライトシティのデパートよりも多かった。どうやら一階は食料品売り場らしく、カウンターの先には産地直送と書かれた果物が置いてあった。BGMは今人気のアイドルの歌（歌詞抜き）が流れている。階段の近くには水を買う機械とエレベーターがある。

レイリーはそのエレベーターを見つけ、二人を手招きしながらエレベーターの下矢印のボタンを押す。しばらくすると、扉が開いて人が出るのを待ってからレイリーはエレベーターへと入る。

レイリーはB4のボタンを探した。

「……B4のボタンが無い」

## 方位と色

「本当だ！　ない！！」

「どういうことだ……？」

「いったん一番下まで降りてみよう。ボタンが無いことが気になるが、何かB4に降りる道があるかもしれない」

「しかし、それが無かったらどうするんだ？　まさか、デパートの外からB4にいくわけじゃないだろうな……」

「わからない……だが、やらないよりはましだろう」

レイリーは一番下のB3のボタンを押した。昇降路をゆつくりと落ちていく感触をレイリーは感じ取っている。ファルは腕を組んで取っ手に座っている。ティアは障害者用に付けられている鏡を見ながら髪を触っている。

ピンポーン。B3階です。

その音とアナウンスと同時に扉が開く。扉を出ると、そこは図書館があった。図書館と言うだけあって色々な本が並べられている。

地下の図書館。さぞかし静寂に包まれているだろう。

三人のリズムが違う足音が図書館に響く。他の音は不自然なほどない。レイリーが思った通り、客は一人もいない。さらにカウンタ―にも誰もいなかった。

無人の図書館である。

「なんか……不気味っすね」

「ああ……」

レイリーは辺りを見回しながらB4へ続く扉や通路を探す。

「兄貴、俺はエレベーター付近を探します」

「わかった」

図書館はそんなに広くはなく、1600?ほどの広さだった。北にはエレベーターとカウンター。西には机などが並べられていて、東、南には棚が置かれている。

（西を探してみるか？ 客が本を読む所にエレベーターではいけない所につながる扉や通路は避けた方がいいと思うが……）

数秒間考えた後、レイリーはエレベーターから遠い位置から順に探すことにした。だが、レイリーがい歩踏み出す前にティアが見つけたとレイリーとファルに知らせた。

レイリーの後ろかファルが軽々と通り過ぎて行く。レイリーも浩浩ファルについて行く。

ファルについて行くと東と南の壁が交わった角の所にティアがいた。ティアは二人に手招きをしている。

二人がティアの目線の行き所を見ているところには扉があった。もちろん立ち入り禁止のシールが貼られている。

「行くしかないな」

レイリーは扉を開けて奥へと進んだ。奥は書庫だった。数々の古い本が棚に並べられている。明かりは蛍光灯一つである。部屋が狭いため、かろうじて光は届くが、それでも十分に暗かった。

「なんか……埃臭いっすね」

「どこかB4につながる通路を探そう」

レイリーは書庫の奥へ行き、眼を光らせる。ドッドドツと床を踏みながらファルは棚を退かしたり、本を蹴散らしている。ティアはコツコツと静かに歩きながら棚を見ていた。

「……のわっ!!」

ボタンと言う音。その直後バサバサツと本が落ちる音がした。

「いっつつつ……」

「大丈夫か？ ファル」

「すみません、滑って転んでしまいました……」

「まったく」

レイリーは本を拾い始める。その時、ある鋼鉄の板が眼についた。その板にはコードがついており、そのコードを辿っていくと棚の後ろに入って行った。レイリーはその棚を倒した。

棚の裏には扉があった。とても手入れされていて錆びたところはどこにもない扉だ。レイリーはそのドアノブを回し、押し引きしてみたが、開かない。

「鍵穴は見つからない……どうやら電子ロックされているようだ。となると……」

レイリーは先刻見つけた板を拾う。それを裏返してみると、上下左右にライト、その近くに一つずつボタンが付いている。そして、中心にはよく地図に書かれている方位マークが書いている。

「取りあえず、ボタンを押ししようよ」

ファルはレイリーから板を取り上げ、上のボタンを押した。すると上のライトが青く変わる。二度押すと赤、三度押すと白、四度押すと黒に変わり、五度目はライトが消えた。

「青、赤、白、黒ですか……」

「何かルールがあるらしいな」

「方位に色……」

「……わかんないっす」

「ああ、俺もだ。ティアは？………って、何本読んでるんだ」

ティアが読んでいたのは数々の国の伝統が書かれた本。ティアはそれを棚に戻すと、口を開いた。

「暗証番号がわかった」



## 下準備

ティアはそう言うത്ファルの持っていた板を取り上げた。

「どういうことだ？ ティア」

「おそらく、四神のことじゃないか？」

「四神？」

「ああ。ある国で伝統的に天の四方の方角と季節を司る靈獣のことだ。四獣、四象、四靈ともいうが……ここは四神で話を進めて行く。四神の種類は名前の通り、春と東を司る青竜<sup>せいりゅう</sup>、夏と南を司る朱雀<sup>すざく</sup>、秋と西を司る白虎<sup>びゃっこ</sup>、冬と北を司る玄武<sup>げんぶ</sup>の四種類だ」

「で、それがどうしたんだ？」

「先刻も言っただろう。四神は天の四方の方角を司る靈獣なんだ。そして四神は象徴する色がある」

「あ！ それぞれの司る方角に象徴する色を点ければいいんですね  
！！」

「その通りだ。東の青竜は……青」

ティアが右のボタンを一度押してライトを青に変える。

「南の朱雀は……赤」

下のボタンを二度押してライトを赤に変える。

「西の白虎は……白」

左のボタンを三度押してライトを白に変える。

「北の玄武は……黒」

上のボタンを四度押してライトを黒に変える。

「ファル、扉が開くか試してくれ」

「わかった」

ファルが扉のノブを掴む。そして手前に引くと扉が開いた。

「どうやら……正解だったらしいな。行こう」

「ティア。お前は一体何なんだ？」

「……ただの人間。それだけだ」

ティアはファルに続き、扉の奥へと消えて行った。

「うまく流したな……」

レイリーもティアに続き、扉の奥に入った。どうやら階段が下に続いているらしい。

「多分ここがB4に降りる通路だろう」

レイリーは迷わず階段を降りた。

「ほう、三人も客が来るとはな」

階段を降りると、カーペットが敷かれていて、その上には大量の銃。そして、老人が座っていた。

「ダフストの古い友人か？」

老人は目を丸くした。

「と言うことは、電話でダフストが言っていた奴らか？」

「ああ、その通りだ」

「よし、遠いところからはるばる来たもんだし、半額にしてやろう  
！」

「本当に……いいのか？」

「金を置いてもってけドロボウ！」

「それは泥棒じえねえよ」「」「」

「ツツコミも合ってるな」

「……銃、選んでいいか？」

「おお、いいとも」

三人はありったけの銃をあさった。三人が取ったのは、G36（×2）、CZ75、ブレン・テン、マカロフ（×2）、手榴弾三つだった。

「ブレン・テンなんて三年間しか生産されていなかったものだぞ？  
よくこんなのが手にはいったな」

「こっちは専用の工場があるんだよ。その銃は偽物さ」  
「<sup>コピー</sup>」

レイリーは背中にG36をかけ同時に貰ったホルスターを取り付け、ブレン・テンとCZ75を仕舞った。

「お前さんたち、おまけにこれをやるよ」

老人が出したのは四つの自作マガジン入れだった。ベルトに取り付けるように設計されている。

レイリーは早速それをそうちやくし、上からコートで隠した。二人も準備が終わったらしい。

「じゃあな、おじさん」

レイリーは老人に金を渡してその場を去った。

そのころ、レイリーたちが向かうカイザビルではスーツ姿の社員たちが次々と出て行く。その周りにはパトカー、そして警察官が棒立ちになっていた。

「願いを聞いてくださって有難うございます」

その中にいたブロウがリーダーらしき者にぶかぶかと頭を下げた。「いや、あの組織を捕まえるチャンスが来たんだ。聞かなきゃどうする。それより、社員の退出を促してやってくれ」

「了解です」

ブロウは退出する社員のもとへと走った。

（後は頼むぞ、レイリー。　　）

「何やら外が騒がしいなあ……」

「はっ。上からの情報によると、上の階の社員たちを警察が全て退出させたそうです」

「多分こちらの場所を気付かれたんだろうね、ハッキングされて

たし。まあハッキングを阻止できなかった奴は殺したけど」

「迎撃しますか？」

「別にいいよ。僕は生肉が食べればそれでいいし。地球の人口を減らすことが父さんの目的だし。阻止されたら、君たちの苦勞が水の泡になっちゃうもんね」

「了解」

その男は静かに部屋を去った。もう一人の男は生肉を取り出し、口に入れた。

「生肉だ〜いすき」

## カイザビル

「突入しようと思っただけなんだが、する意味が無いな」

「そうですね、普通に入れちゃいましたね」

三人はカイザビルの一階にいた。中にいる者は三人以外誰もいない。それも当たり前だ。ブラウたちが全員退出させたのだから」

「それで、ボスの所はどこなんですかね」

ファルが周りを見回しながらレイリーに囁く。

「確か、あいつはカイザビルしかいってなかったな」

「何階かは聞いておいてくださいよ」

ファルが呆れたように言う。

「黙って見てたくせに」

レイリーはエレベーターを見つけ、ファルに鋭い言葉を心に刺してボタンを押した。

「何か……怪しくないか？」

ティアが発言する。

「どういうことだ？」

レイリーが電光掲示板を見ながら言い返す。

「普通、自分の基地の入り口を手薄にするか？　ここで働いている社員が全員居なくても、誰か見張り一人は居ると思うが」

「気をつけるってことだろ」

エレベーターの扉が開く。そして扉の奥には銃を構えた迷彩服にバンダナをつけた男だった。

「っ……！」

レイリーは前転でその場を離れる。その直後、エレベーターの向かいにある壁に幾つもの穴が開く。

「ほら、いったたる！」

レイリーは入口の近くにある二人が隠れているカウンターへと走りながら左手でブレン・テンをホルスターから引き抜き、エレベー

ターに乱射する。レイリーの見ていた電光掲示板は壊れ、籠の内部には穴が開いた。「ぐはっ！」敵の一人が倒れる。その脳天を撃ち抜いたのはファル。右手にマカロフを持っていた。ティアも両手に持つもう一つのマカロフで応戦する。

特に命中率がいいのはティアで、部屋に何も残さず相手を撃ち抜く。百発百中である。

「もうエレベーターも壊れたしいきますよー！」

ファルはコートを脱ぎ棄て、マカロフをホルスターに仕舞って背中にかけられたG36を持った。そして両手を物陰から出すと、相手も見ずに鉛をばら撒く。命中率は低いが銃弾は多いので、相手に幾つか銃弾が命中する。

「あと何人ですか？」

ファルがマガジンを取り換えながらレイリーに聞く。

「後数秒でゼロにしてやるよ」

レイリーはカウンターに登り、そこから高く飛んで二丁の拳銃を残った敵に撃ち続ける。そこから床に背を向けて落ちると、トランポリンにでも乗っているかのように体を高くバウンドさせ、マガジンを空中で取り換え、乱射した。

敵が全員倒れるのを見ると、レイリーは体制を変え、地面に掌をついて肘を曲げながら縦に180°回転した。

「ふう……」

「どんな身体能力をしているんだ？ 怪物か？」

「……ただの人間。それだけだ」

レイリーはファルと共に階段へ歩いて行つた。

「うまく流したな……って、それは先刻私が言ったような……」

ティアは呟きながら階段へ向かつて行く。階段の前にはレイリーが考え込んでいた。

「さてこれから上か下かどちらに行くべきか……」

「敵が上から来たんですからボスは上にいるんじゃないんですか？」

「そうだな。なら上に行こう」

「ちょっと待った」

階段を上ろうとする二人をティアが引きとめる。

「そんなに単純な考えでいいのか？」

「いや、これが普通ですよ」

「その裏をかいて地下にいるんじゃないか？ わざわざヘリで攻撃されそうな所にボスがいるっていうのもおかしいし……」

「そう……かも」

「兄貴っ！」

「今回はティアの言う通りにしよう。ファル」

「……わかりました。どうなっても知りませんよ」

ティアは先導して階段を降りて行った。

「兄貴、本当にあの人を戦いに巻き込んでよかったんですね」

「わからない。だが、あいつ自身がいったんだから、拒否する必要はないだろう」

「でも、あの人は女なんですよ？」

「どこかで聞いたことはあるが」

「

「女は精神が強いんだよ」

レイリーもティアに続き、階段を降りた。

「いや、精神だけでどうにかなる問題じゃないだろ」

レイリーが階段を降りて数秒後、銃声が鳴る。ファルはマカロフを持って階段を降りた。

## ティア

ファルが階段を降りてみると、二人は物陰に隠れながら扉が外れてしまったB2階の入り口の奥にいる多数のサブマシンガンを持っている敵と戦っていた。

レイリーが安全ピンを抜いた手榴弾を投げた。敵の一人が「グレネード！」と叫び、全員がその場を離れるが、約5人が爆発で逝く。敵が怯んでいる隙にファルを残してレイリーはG36、ティアはマカロフで発砲しながら机へと滑りこみながら身を隠した。そしてその数秒後、銃弾の雨が二人を襲う。どうやらファルのことには気付いていないらしい。

ファルはその事に気付き、G36を構えるが、敵の一人がそれに気付いた。ファルは素早く気付いた敵を銃殺する。今の発砲音で敵が気付くかもしれないので、その前に敵にG36の集中砲火を浴びせる。残った敵にティアは素早くマカロフで額を撃ち抜き、残った一人にはレイリーが机を飛び移って高く蹴りあげ、寝ころんだと思えば、素早く二丁の拳銃を取り出し、撃ち上げた。

撃ち上げられた敵は無残に落ちて逝った。

「急ごう。ボスが逃げるかもしれない」

「ああ……」

ティアが開き戸を蹴り開き、マカロフを持って向かっていく。だが、銃声はしない。

二人は安全だと思ったのか、扉の奥に入っていくと、ティアはすぐ近くに立ち止まっていた。ティアに向かって立っている男がいた。その男はナイフを持っている。そのナイフは男の左手で捕まえられた20代前半の女の首に向けられていた。その女は震えながら声を出さずに泣いている。

「ほつ……ヒューチャーチップを持っている本人を連れてくるとはな。しかし、こいつを人質にして良かったぜ。何せお前の妹だから



な!!」

ティアは獲物を狙う虎のような目つきをして男に言った。

「ミヤを……どうするつもりだ」

よく見るとティアは銃を強く握っている。男はその姿を見て嘲笑っていた。男はレイリーを見た。

「……そうだ。こいつの正体を教えてやろうか？」

「

「ここで働いていたヒューチャ チップ搜索員さ。今までヒューチャ チップを持っている疑いのある者を何百、何千と殺してきた、殺人鬼なんだよ!」

「っ!？」

「だが、私は辞めた……」

「それでも、ヒューチャーチップを持っている奴がこいつと予想したんだろうが!!」

男はレイリーを指差した。

「そしてその予想は当たった!! お前は辞めても俺たち人口減少<sup>ス</sup>者の最大の貢献になったことは間違いないんだよ!! お前は!俺たちから逃げられない!!」

「違う! あれは偶然だ! 搜索員をやめようとした時に当たってしまったんだ!」

「当たってしまったじゃなく当たっただろ! そしてお前は当たったことを知り、すぐに逃げ出した!」

「それはお前たちに驚異的存在<sup>キラウィルス</sup>と言われ束縛されるのがいやだったから……」

「違っだろう!? お前は自分の手で殺してやりたかったただけなんだろう!!」

「そんなことは思っていない!」

「そしてわざとヒューチャーチップの所で倒れた!」

「偶然だ!!」

「そしてハッキングの最後の罠にかかり、そこから位置を発信した！ 殺されはしたが、あの研究員は俺たちに貢献しただろう！ お前は自分では殺せないのを知って助けを呼んだ！ こいつが死ぬのをずっと待っていたんだ!!」

「違う違う違う！ 私は妹を助けたいと思って」

「こいつらを利用したんだろ!! そして最後には自分の妹を助け、後は相打ちになるよう仕向けた！ 最終的にこいつらをここまで誘き出した！ 感謝するよ!!」

「違うんだ 私は!!」

「パァン!!」

「ぐ……」

一つの銃弾がティアの腰に当たる。ティアがその場所を抑えるが、血が流れ落ちる。

「しかし、お前は仲間を殺した！ それぐらいの罰は受けてもらわないとな!!」

「ティアさん!!」

「姉さん!!」

ファルとティアの妹であるミヤが叫ぶ。レイリーは表情を変えずずっと男を見ていた。

「私は辞めてからレイリーを敵だとは一つも思ったことはない!!」  
レイリーが少しだけティアの瞳を見た。

「……さて、これでこいつが敵だと分かったか？ レイリーさん」

「俺は」

「ティアを信じる。お前は信用できない」

その言葉に驚いた男は両手の力を抜いてしまい、ナイフを下ろした。ミヤはすぐにそれがわかり、手を振りほどいてティアのもとへ行く。それを見た男はホルスターに入れたトカレフに手をかけるが、その時にはレイリーが持っていたCz75の銃弾が男に直撃していた。

「ぐっ……」

男は息絶えてしまった。ミヤ、ファルの二人はティアに駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

「……ファル。ティアを頼む」

「でも、ボスに一人でたち向かうつもりですか？」

「その通りだ」

「無茶ですよ!」

「必ず戻ってくる。それまで待つてろ」

レイリーはファル達を残して階段を降りて行った。

## 階段

レイリーは階段を一步一步降りて行く。

あいつらの目的は一体何なのか。

地球を破壊したいのか。

人口減少者ウィルスは何のために作り上げられたのだろうか。

自分たちのしていることは正しいのか。

もしかしたら自分たちが悪なのか。

だが、必ず負けられない。

仲間を傷つけられたから。

ともに戦ってきた仲間を傷つけられたから。

もちろん自分は相手の仲間を傷つけ、殺めた。

自分は何のために来たのだろうか。

今でもまだ思い出せない。

自分勝手な考え？

仲間のため？

自分の邪魔をしたから殺す？

いや……………

自分はこの宝物を守るため、来た。

今でも病院で包帯だらけの父が自分にこの頸飾りを渡してくれたことを覚えている。

「これを……………守ってくれ」

その言葉も覚えている。そして、父がその直後息絶えたのも。

この頸飾りが父の命に値するなら、

俺は死ぬまで守る。その為に戦う。

自分は自分の行動に肯定も否定もしない。

大切なのは自分の感情。

レイリーは最後の一段を降りた。

カイザビル、崩壊。そして……

「よく来ましたね。最初には上に行くと思っただけどなあ」

レイリーは広い部屋にポツンと一つ置かれた高級そうな椅子に座った青年を見ていた。椅子のすぐそばには冷蔵庫。後ろにエレベーターがある。そして、青年は左手に何かのパック。右手に何かの生肉を持っていた。レイリーはその青年に見覚えを持っていた。

「お前は……レブライトシティのデパートにいた……」

「ああ。あそこの生肉は美味しかったよ。で、何しに来たんだ？ 大人しくヒューチャ チップを渡す？」

レイリーは青年を睨みつけたままだ。

「それとも……死ぬ？」

青年はホルスターに仕舞われたF N Five - seven を取り出した。

「俺はお前に地獄を配達しに来たんだよ」

レイリーは手榴弾を投げた。青年は咄嗟に椅子を降りて後ろへバツク宙した。爆発と同時に青年はエレベーターの籠に入り、扉が閉まる。

「エレベーターは壊れたはずでは……くそつ、別の奴か」

レイリーは電光掲示板を見ようとしたが残念ながら電光掲示板が見当たらない。

エレベーターがこちらに来たらしい。レイリーは赤いボタンを押した。扉が開いた。中には誰もいない。

レイリーは籠へ入り、中にある多くのボタンを押した。

扉が閉まり、エレベーターが上へと行く。その籠の中は緊迫した空気が漂っていて、まだ生肉臭い匂いが混じっていた。

しばらくして、扉が開く。扉が2cm開いたところで扉の裏で一人の敵が銃を構えていることに気づき、咄嗟に身を屈める。そして銃弾がガラスに当たり、レイリーに降り注ぐ。

レイリーはスライディングしながら敵の足を蹴り、転ばせてG3  
6を乱射する。

「我ながら残酷だな……」

レイリーは自分の残酷さに恐怖さえ覚えた。その感情を振り払う  
ようにしてレイリーは周りを見渡す。

周りはその恐怖を引き立てるように黒一色。机、窓、すべてが漆  
黒の色だった。

窓の外を見ると、どうやら地上に出てきたらしく、下の道路  
が小さく見える。推測として10階ぐらいにいるのだろう。

「こつちこつち。スタジアムに案内してあげるよ」

「ふざけるな！」

レイリーがG36を撃つが、すでに青年はいない。

「くそっ」

レイリーはG36を肩にかけ、青年を追う。だが、廊下を曲がつ  
てある部屋に着いた時には誰もいない。だが異変が起きていた。

「窓が割れている……」

パサッ……

パラシュートが落ちる。青年はバックを外し、ケータイを取り出  
した。

「もしもし、僕のビルの10階をヘリで破壊してくれる？……うん。  
頼むよ」

青年はケータイを仕舞い、10階を見上げていた。

「また、ビルを買収するか」

青年はレイリーを騙した。

レイリーは道路に立っている青年を見つけ、手榴弾を持っていた。

これが最後の手榴弾である。そして狙いを定め、安全ピンを抜いた。その時、床が揺れる。地震では無い。どこかで爆発が起きたのだ。そしてガクツと床が傾いた。一つの机がレイリーに当たる。

「ぐおっ……」

レイリーはその時持っていた手榴弾を離してしまい、爆発が起きる。周りにあった物は吹き飛び、壁に当たって大破する。その残骸は爆発と共にレイリーに襲いかかる。

爆発や大破した物の残骸で吹き飛ばされてしまったレイリーは窓を突き破って外に出てしまった。レイリーはすぐにビル縁につかまり、落下を阻止する。ガラスで切ってしまった額の傷が痛む。血は目と鼻の間を流れ、地上に落ちる。何とかビルの床によじ登ると、床は30°まで傾き、机や椅子が次々とガラスを突き破っていった。レイリーはそれを何とか避けながら、壁の手すりに捕まる。その時、固定された机に挟まれた椅子を見つけた。そして、突き破られたガラスの向かいには隣の二階建てビルの屋上。ビルの屋上に行くには今しかない。

レイリーは挟まっていた椅子を取り出し、その上に乗った。椅子は突き破られたガラスに向かって加速していく。タイミングを見計らって屋上に向かってジャンプする。

後、2メートル。

後1メートル。レイリーが屋上のフェンスを掴む。そしてその勢いを利用して二階の窓を蹴り破った。

ズドオオオンー！！

ビルが倒れる。どうやらレイリーは助かったらしい。フェンスに手が届いていなかったら、今頃あのビルの下敷きになっていただろう。



レイリーは一階に降り、扉を蹴り開けて、青年がいた所に急いで向かう。

青年は笑っていた。崩壊したカイザビルを見つめて。そしてレイリーからいつの間にか奪っていたヒューチャーチップを見つめて。

レイリーがその場に着く。青年はその姿を見ると、大きく目を見開いた。

「ままさか……生きていたんだとね……」

いつもよりしゃべり方がおかしくなっている。

「君の弟子に……か感謝するといいよ……」

その時、何かが青年に頭上から落ちてきた。それは大破したヘリだった。青年は下敷きになって息絶えてしまった。

「兄貴……」

ファルの声。レイリーが声のしたほうに振り返ってみると、ファルが狙撃銃であるバレットM82を持って立っていた。

「ヘリを……狙撃したのか」

「はい……」

「とりあえず……お疲れ様でした」

ブロウがやってくる。

「つくづくお前はついてくるな」

「狙撃銃返します」

ファルはブロウに狙撃銃を渡した。

「先程、この青年の父親と思われる者を逮捕しました。他の者たちも全員逮捕しています。ご協力ありがとうございました」

レイリーはブロウの言葉に聞く耳もたず、青年の握っていた頸飾を取った。

「これは……どうするんだ？」

「持っただけでも結構ですよ。それで起動する機械は我々が封鎖しま

した」

「ティアは？」

「今病院に連れて行きました。後から事情聴取するつもりです」

「ああ、わかった」

「帰りのチケットを買っておきました」

「さつさと帰らせてもらおう」

レイリーは持っていた銃を全てブラウに渡し、その場を去った

そして、時が経ち

「場所は、第二公園だ」

「わかった」

レイリーは荷物を持ってランエボ？に乗る。

「今日はどんな依頼ですか？」

「黙って見てろ」

「はいはい……」

レイリーはアクセルを踏み、ランエボ？は駐車場を抜け、大通りを走って行った。

カイザビル、崩壊。そして……（後書き）

ご愛読。、ありがとうございました。違う小説も読んでいただくと  
うれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9489m/>

---

黒の配達屋

2011年2月6日15時40分発行